
DOUBT SNIPER

鈴木 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOUBT SNIPER

【Nコード】

N2248D

【作者名】

鈴木 歩

【あらすじ】

売れないアクション俳優の圭は、元自衛官で射撃のオリンピック候補だったという異色の経歴を持つ。周囲の評価は決して低くないのだが、圭自身は三十歳を目前にして焦りを感じ、自信を失いかけていた。一方、謎の組織に属し、自信に満ち溢れている国際的スナイパーK。悲劇は、正反対の二人にある接点があったことで引き起こされていく……

プロローグ（前書き）

アクションコメディです。 気負わずに読んで頂けたら幸いです。

プロローグ

プロローグ

某県某所にある荒涼とした、石灰岩採掘場跡地。

そのイメージとして、特撮ヒーローが悪の軍団と戦っている絵づらを思い浮かべる人が多いだろう……。

ピンポン！！まさにその通り！

八月、猛暑たけなわ。何が楽しくて太陽はあんなにがんばって燃えちゃってるんだらうと、暑さでモウロウとそんなことを考えてしまいそうな日。

日本各地で「夏休みヒーロー大集合ショー」と同時に世にも過酷な撮影が今日も行われているのである。

ミッキーマウスは、世界に一人（一匹）しかいないので、ディズニールランドで同時刻に複数のミッキーマウスは現れないことになっているというが、ヒーローの世界は稼ぎ時の夏休み。うんな甘いことは言わずにガンガン各地に出没……。とは言っても、お母様方垂涎の的、イケメンヒーロー君たちは確かにこの世に一人しか存在しないので、各地のデパートや遊園地で戦っているのは、決してマスクを取ることでできない彼らの分身ということになる。

古の頃、クールに一人で孤独や敵と戦っていた正義のヒーローたち。時を経て平成という時代の波の中、彼らは孤独に我が子と戦うお母様方のヒーローとなり、「イケメンヒーロー」なる流行をもたらした。

結果……、孤独な寂しさを胸に秘めていたはずのヒーローは、友情や葛藤で結ばれながらその数を増やして、あれよあれよという間に増殖。今やワンクールで十人近く、一年で約三十人もヒーローが輩出されるという結果となった。

そして彼らはそれをステップに「イケメンヒーロー」から、やはり

お母様方御用達の「昼のよめきドラマ」に進出し、はては若手人気俳優の象徴である「月」にまで這い上がって行くようになったのである。

まあ、単純に考えて……、「ヒーロー」なのだから当然アクションが出来る。という事は運動神経抜群。加えて大抵の場合、高身長、小顔、そしてイケメン……。ま、モテるわな。普通に。

という訳で、今や若手の俳優さんたちにとっても「ヒーロー」役は垂涎的。老舗のアクションプロダクションから、新規参入のちっこい事務所までが必死こいて「ヒーロー」役ゲットに励んでいる。そして、新たにその「ヒーロー」をゲットした若者がまた五人生まれた。

十月から始まる新番組。その名も「カッチャレンジャー」のニューヒーロー五人組。平均年齢二十一・八歳。紅顔の美青年四人と、チャームिंगな少女が一名。昔のようないわゆる「お笑い担当」は必要ない。とにかく「イケメン」攻撃でお母様方のハートをゲットするのだ！

関連グッズを欲しがるのは子供の役目だが、実際財布のひもをあけるのはお母様たちなのだから……。

秋からの放送開始に向けて、今まさに撮影絶好調！

敵は、銀河系の隣の横丁をちよつと入ったところにある「ツクエカンドル星」を拠点とする「スラムガ帝国」。奴らは、自分の星の環境汚染と慢性的な食料危機に苦しんでいた。そこで、「イムニダラー総統」は地球強奪計画を勝手に企てた。

そして、ある日突然、スラムガ帝国副総統「ヴィルト・カツツエ」率いる「ジャラクター」が地球を征服すべく攻撃を開始してきたのだ！

そこで、急遽集められた「カッチャレンジャー」。実は、彼らはそれぞれ特異の超能力を持ったミュータントなのだ！

いざ、平和のために戦えカッチャレンジャー！地球の未来は君たちにかかっている！ゆけ！カッチャレンジャー！この暑さに負ける

な！そうだ君たちは若い！顔がいい！ああ、若さって素晴らしい！
しつこいようだが、撮影は絶好調。今日はヴィルト・カツツエと
カツチャマン五人の初めての対決シーンの撮影だ。

シヨッカーばりの全身タイツ姿の部下が運転するバイクのサイドカ
ーの上に立って、ヴィルト・カツツエ登場！バイクは環境にやさし
くないツーサイクル三気筒エンジンだ。地球の環境も考えないと、
強奪しても住めなくなるぞ！そこそこ、ヨロシク。

早くも一気筒カブったらしく、エンジンの音がおかしい。が、そん
なことでいちいち撮影を中断してられない。

不愉快なエンジン音に負けじとヴィルト・カツツエは大声を張り上
げて、セリフを叫んだ。

「ごきげんようカツチャの諸君、やっと会えたわね」

百九十センチ近くはあろうかという大男。細身の体に皮膚の一部
にでもなつたように肌に吸い付くスラムガ帝国特性素材でできた、
黒のスーツで全身を覆っている。さらに、同素材でできているブー
ツとグローブ。その上には、風に緩やかになびくマントを羽織って
いる。

そして、頭には帽子を被っているのだが……、この帽子がなんと
もはや。

「ヴィルト・カツツエ」の名前のごとく山猫をモチーフにしてい
るらしいのだが……、どう鼻屑目に見てもブサイクなキティちゃん
にしか見えない。山猫のような迫力がないという以前の問題である。
大人が見るとどうしても笑いをこらえ切れないという代物なのだが
……。子供には、うけるのか？

ヴィルト・カツツエは眉の下まで帽子を被ってはいるが、目から
下ははつきりと役者の顔が見えている。

当初の予定では、帽子ではなく猫型のお面をつけるはずだったが、
それではヴィルト・カツツエの性格設定がうまく伝わらないという
ことで、急遽お面から帽子に変更された。そうか、それで時間がな
くてあんな変な帽子になっただな……。

そこまでして、強調したかったヴィルト・カツエの性格とはな
んぞや？

そう、すでにお気づきの方も多いと思われるが……。実は、ヴィ
ルト・カツエはバリバリのおカマさん。地球を征服したら、まず
初めにモロッコに行きたいと切望している人生なのだ。

ゆえに、目深に被られた帽子の下にのぞく役者の顔は、見事なお
姉さまメイクが施されている。親でもちょっと見抜けないだろうと
思われるほどの立派なメイク。いや、親が見抜けないようにという
役者サイドからの希望があつたのかもしれない。いやはや、お気持
ちお察します。

そんな、ヴィルト・カツエとは対象的に、爽やかな中にも強い
意志を秘めた五人の若者。いかにも、たつた今気が付きましたとい
う不自然なりアクションでヴィルト・カツエの方を向く。

「お前は誰だ！」

叫んだのは、カツチャ赤。

「私？私はヴィルト・カツツエ」

ヴィルト・カツツエは科を作ってイケメンのカツチャ赤にアピール。

「ヴィルト・カツツエ？一体何ものだ？どこから来た？」

またもやイケメン、カツチャ青にヴィルト・カツツエ興奮。

「あなたたちを救うために、宇宙の彼方から来たの」

「俺たちを救うだって？」

カツチャ黄の質問には、とうとうウィンクまでしちゃうサービス
ぶり。

「そうよ。そのために偉大なるイムニダラー閣下の代わりに地球に
来たのよ」

「ふざけるな！」

いきなり戦闘モードのカツチャ緑。

「あら、若いわねえ。でも、そのうち認めることになるわよ。若
さゆえの過ちを！だから今のうちにさっさと降伏なさい！」

とカツチャ緑に投げキッスをするヴィルト・カツツエ。

「なによ！私たちそんな安っぽい人間じゃないわ！」

やりとりを見ていたカッチャ桃が、ヒステリックに金切り声をあげた。

その瞬間、

「おだまり！この小娘が！」

こちらにも負けじとヒステリックに叫ぶと、ヴィルト・カツエの武器である鞭がカッチャ桃の頬を打った。

鞭なんだけど、そりゃ鞭なんだろうけど……、なんだかきつとスペシャルなネーミングがされていて、んで本当はすごい特殊効果とかがあるんだろうけど……、新体操のリボンにしか見えない……。「なにすんのよ！お父さんにもぶたれたことないのに！」

打たれた頬を手で覆いながら、カッチャ桃が叫んだ。

「ほほほ！いいザマなこと。ついでだから全員おそろいの傷を作ってあげましょうか。イケメンの頬に傷つていうのも、うんチャーミングじゃない」

と、言いながらヴィルト・カツエはまたもや鞭を振り上げた。

唸りをあげて向かってくる鞭を寸でのところでかわしていくカッチャマンたち。早くも絶体絶命の危機が彼らを襲う！！

「ようし、こうなったらあの技を出すしかない！みんな変身するんだ！」

カッチャ赤はそう叫ぶと、変身のポーズを取った。カッチャ赤の言葉にうなずきながら、次々と変身のポーズを取るイケメンヒーローたち、一番の見せ場だ。（この辺は、各々ご幼少のみぎり好きだったヒーローの変身ポーズを思い浮かべて下さい。思い浮かばない場合は、「テクマクマヤコン」と三回唱えてみましょう）

華麗に変身した五人。

「われ等、カッチャマン」

五人揃って決めのポーズだ。

「ほほほ。面白いじゃない。私に勝てるのも思っているの？」

「俺たちの力を見せてやる！」

そういつたカッチャ赤は、なぜか突然カラフルなバレーボールを持っていた。

「みんなでこのハイパーボールに気力を注入するんだ！行くぞ」

そうカッチャ赤が叫んだ次の瞬間、なぜかそこにはバレーボールのコートが出現。カッチャ赤・カッチャ黄組と、カッチャ青・カッチャ緑組に分かれてすばやくコートの上に立った。

すでに審判席に座っていたカッチャ桃が笛を吹くと、カッチャ赤の見事なジャンピングサーブで試合は始まった。

倒れこみながらも、サーブレシーブを上げるカッチャ青。すばやくボールの下に入り込み、カッチャ緑がトスを上げる。カッチャ青、ジャンプしてスパイク！しかし、ほればれとするようなタイミングで飛んでいたカッチャ赤のブロックに阻まれ、ボールははじき返された。

しまったという表情のカッチャ青。しかし、そこにカッチャ緑が飛び込んで見事にレシーブ。ボールは天高く舞い上がり、好機とばかりにカッチャ青はトスを省いて再び強烈なスパイクを放った。

コートの横で、理解に苦しんでいるヴィルト・カッツェ。明らかに変な帽子の上にクエスチョン・マークが見える。

が、ヴィルト・カッツェを無視して、試合は進んでいく。

カッチャ青のスパイクをなんとか受け止めるカッチャ赤。苦しい体制でなんとかトスを上げる、カッチャ黄。すると、その瞬間カッチャ赤が吼えた。

「行くぞ！」

カッチャ赤、最高到達点三五〇センチはあろうかというジャンプ！そして……、ヴィルト・カッツェに向かってスパイク！

唸りをあげてヴィルト・カッツェに向かっていくボール。

「きゃあ！なに、なに？早く、バイクを出して！」

ヴィルト・カッツェが慌てて部下に命令するやいなや、バイクは急発進し、あるうことがヴィルト・カッツェはサイドカーから放り出されてしまった。

必死こいて逃げるヴィルト・カツツエ。しかし、ボールはどんなヴィルト・カツツエに向かって近づいてくる。

逃げるヴィルト・カツツエの足元にとうとうボールが落ちた！爆発するボール。倒れこむヴィルト・カツツエ。

「どうだ、思い知ったか！」

晴れ晴れとしている、カツチャレンジャーたち。

するとそこに、いきなりヘリコプターが現れた。

ヘリコプターから垂らされた縄梯子に、しがみつくヴィルト・カツツエ。

「もう！覚えてなさいよ！今度あつたらただじゃおかないんだから！」

捨てセリフを吐きながら、遠ざかっていくヴィルト・カツツエ。

「おう！この世にカツチャレンジャーがいる限り、地球の平和は永遠だ！」

決めセリフをいうカツチャ赤。

それにあわせてそれぞれポーズを決める五人の後ろには、今日もきれいな夕焼けが輝いていた。

第一章 圭

—

「これで貴様も終わりだ！」

そういうと、派手なアロハシャツを着たチンピラ風の男は拳銃を構えた。

大きな螺旋階段がある廃屋のビル。チンピラ風の男は、その螺旋階段のてっぺんに立ち、コルトガバメント四五の銃口を階段の下に向けた。

「そうかな？」

階段の下には、余裕の笑みを浮かべている男。こちらはチンピラ風の男とは正反対で、実にセンスのいいスーツを華麗に着こなしている。

「ど、どういう意味だ！」

チンピラ風の男はおずおずと叫んだ。声が裏返っている。よく見ると、拳銃を持つ手が小刻みに震えていた。

「それは……、こういう意味だ！」

次の瞬間、廃屋のビルに銃声が響いた。

スーツの男が早抜きで放った銃弾は、見事にチンピラ風の男の額に命中していた！額から噴出した血が、派手なアロハシャツに彩りを加えていくように流れ出ている。

「うおーっつ！」

チンピラ風の男の体がもんどり打って、思わずエビゾリになった。顔には断末魔の苦悶の表情が浮き出ている。

スーツの男は階段下で、憎らしいくらいクールにその状況を見つめている。そして、遂にチンピラ風の男が階段から落ち……そうになった瞬間……。

「カーッと！」

監督の大きな声がビルにこだました。

「いや、よかったよ二人とも」

当代二大人気俳優の迫真の演技に、監督はご満悦のようだ。

「これはいい映画になるぞ！君たち二人のおかげで『夕陽に向かつて撃て』は、大ヒット間違いなしだ！」

「いやいや、僕たちの力なんて微々たるものですよ。この映画はもちろん、監督あつてのものです。僕なんて、監督の映画に出ることだけを目標に今まで頑張ってきたんですから」

スーツの男が、まるでセリフを言うように、滑らかにいうと、

「そうですね！監督は僕ら役者の憧れなんですから」

先ほどまでとは打って変わった笑顔をみせながら、チンピラ風の男も負けずに言った。

「そうかい、そうかい」

監督は、ますます満足気な表情になった。

「それじゃ、僕ら次のシーンの衣装に着替えてきます」

そう言って二人が控え室に向かうと、入れ替わりに背の高い男が入ってきた。

「おはようございます。よろしくお願いします」

緊張気味にスタッフに挨拶をしているこの男は、なぜか先ほどのチンピラ風の格好をした俳優とまったく同じ衣装を着ている。髪型も同じだ。

監督は男に声を掛けた。

「いいか、できるだけ派手に頼むぞ。死んだら葬式は出してやるから心配するな」

「はい、わかってます。ご期待にそうように、精一杯がんばります」男は緊張を悟られないように、用心しながらそう言った。

螺旋階段をゆっくりと上り始めた男の背中に、監督は声を張り上げて念を押した。

「いいか！くれぐれも顔が映らんようにするんだぞ！お前の顔が映ってもだれも喜ばんのだからな！」

背中では監督の暖かいお言葉を傾聴しながら、男は螺旋階段の一番上まで上った。が、その瞬間。

「用意！本番5秒前……」

いきなり助監督がカウントを始めた。

うそ！心の準備が……。

男の顔が曇った。が、もうここまできたらやるしかない。

「スタート！」

男は意を決して、崩れるようにして階段から落ちていった。

長い螺旋階段。転がっていくうちにどんどんスピードは増していく。階段のへりが、手すり、それは残酷な凶器と化して男の体を打ち付けた。

実際はほんの数秒だっただろう。しかし、男にとってそれは無限の時間であった。

ようやく一番下までたどり着いた。が、男は起き上がることができなかった。体中が痛い。一体どこを傷めたのかさえわからないくらい全身が痛む。

「よし！チエックだ」

倒れている男を無視して、スタッフはモニターに集まっていた。そして、朦朧としている男の耳に残酷な声が響いた。

「顔が映っちゃってるじゃないか……。撮り直しだな」

二

モスクワ・ルビヤンカ広場にその男は立っていた。

この時期のモスクワは平均最高気温0度、最低気温マイナス一度という極寒に襲われている。

彼はいかにも仕立てがよさそうなトレンチコートを、英国製のスーツの上にまとっていた。頭上にはこの時期のモスクワではかかせない防寒用の帽子ではなく、粋なボルサリーノを被っている。しか

も、このうす曇の天気の中サングラスをかけているのでその顔立ち
はよくわからない。

それでも、遠めからでも目立つ背の高さと服装の品のよさは、彼
の思惑とは別にモスクワ女性の目をひいた。ほればれと彼を見てい
る女性たちの中には、モスクワでは珍しく東洋人らしき女性の姿も
見られた。

彼がサングラス越しに見つめているのは、旧ソビエト社会主義共
和国連邦閣僚評議会付属国家保安委員会、いわゆる旧KGBの本部
庁舎。

現在はロシア連邦保安庁と名称を代えてはいるが、その姿は徐々
に旧KGBに近づいているといわれている。

彼がルビヤンカ広場に到着して五分程経った時、彼の携帯電話が
鳴った。

彼はゆっくり上着のポケットから携帯電話を取り出すと、ひどく
短い会話をして電話を再びポケットに入れた。そして、彼独特の優
雅な歩みで、赤の広場の方へと向かって行った。

三

晩秋から初冬へと街が姿を変えてから、しばらくたったある日。

十月から放送が始まったカッチャレンジャーは、順調に子供の心
を掴みはじめていた。もちろん、イケメンヒーロー好きのお母様の
心も。

そんなある日の、都内某所スタジオ。出演者控え室前の廊下を、圭
は歩いていた。

目深に帽子を被っているせいで、顔はよくわからない。身長は一
八〇を軽く超えているだろう。長い手足に筋肉質の細すぎない体は、
おそろしくスタイルがよい。ただし、少しばかりガニマタ気味なの
を除けばだが……。

カツチャレンジャーの五人はそれぞれ個室を貰っている。

圭が、カツチャ赤こと松下知久の楽屋の前まで来ると、中から松下の荒げた声が聞こえてきた。

「なんで、弁当の魚に骨があるんだよ！俺に出す前に、ちゃんとつけて言っただろう！」

顔の造形はまあまあだが。松下の演技とアクションはお粗末だ。

それでも、主役デビューを勝ち取ったのは……、番組メインスポンサーの社長令息だから。

さすがにお坊ちゃまは育ちがいいのか、庶民が思いもつかないような我が儘を言っては、スタッフを慌てさせている。

やれやれと思いながらも、圭は足を止めずに通り過ぎ、一番奥にあるいわゆる「大部屋」へ入っていった。

部屋にはすでに十人ほどの若者が待機していた。中には早くも衣装に着替えているものもある。見ない顔だ。新人かもしれない。

圭が部屋に入るなり、待ちきれなかったようにタカシが寄ってきた。

「珍しく遅かったっすね」

「ああ。ちよっとな……」

「先輩、いつも人一倍早く来てストレッチなんかしてるから、ちよっと心配したっすよ」

タカシは、二十一歳。この夏から、カツチャレンジャーと一緒に仕事をしているのだが、なぜだか圭になついてしまって四六時中まとわりついている。

もつとも一緒に仕事とはいっても、タカシの役どころは「悪の戦隊ジャラクター」の一員に過ぎない。まあ、はつきりってエキストラとあまり変わりがない。

「あ、なんか飲むっすか？」

いつの間にか、圭の舎弟気取りがすっかり板についている。

「あ、あゝ、いいや……」

「どうしたんっすか？なんか、元気ないっすね？」

「うん……、そうかな？ いや、ちよつとね……」

「先輩の売りは元気とお気楽さだけなんっすから。先輩の『北極ギヤグ』を聞かないと、こつちも調子出ないっすよ」

タカシは悪びれなく畳み掛けるように言った。

「……」

圭は、出掛けにかかってきた伯母からの電話を思い返した。

圭の部屋は中野にある。

中野というのは新宿まで電車で五分という立地にありながら、昔ながらの木造アパートが数多く残っている。狭くて古いのが難点だが、当然そののアパートは家賃も割安なので、売れない役者や芸人などが多く住んでいることでわりと有名だ。

その中でも、「耐震偽造問題」などとはとんと無縁、普通の人気がつかない震度一 の地震でもしっかりと感知できるほどのオンボロアパートに圭は住んでいる。

それでも、四畳半に簡単なキッチン（と、呼べる代物かどうかはギモン。もちろんトイレは共同。風呂なし）が付いて、駅から十二分家賃三万八千円はありがたい。

部屋の中は、男性にしては程よく片付いている。とはいっても、ほとんどモノがないというのが実情だが……。殺風景というよりは、ずばり「貧乏くさい」。

さて、今日は電車で現場に向かうか、それとも電車賃をうかすために自転車で行こうかと圭が真剣に悩んでいた時に、携帯電話の着信音がなった。

圭は、少しばかり嫌な予感がした。

なにしろ、このタイミングの電話は験が悪い事が多い。撮影が中止になったとか、時間が変更になったとか、たいてい碌なことではない。最悪の場合、「必要がなくなったから、来なくてよろしい」ということさえあり得る。

主な収入をアルバイトで賄っている圭にとって、スケジュール変更

は、生死に関わる問題だ。撮影が遅れて、結果、バイトを無断欠勤することとなり、そのせいでクビになったのも一回や二回ではない。嫌な予感がしつつも圭が電話に出ると、それは伯母の安子からであった。

圭がほっとしたのも束の間、弾丸トークでその名を馳せる伯母の一方的な会話が始まった。

「圭ちゃん、今度いつ帰ってくるの？まだ、アルバイトしなけりや食べれないような生活してるの？もういい年なんだから、ちゃんと考えなさいよ。あら、そういえば圭ちゃん幾つになったんだっけ？あゝそういえば、工藤さんところのメグミちゃん確か圭ちゃんと同級生だったわよね？覚えてる？ほら、色白でおさげにした。それで、この間久しぶりにデパートで工藤さんの奥さんに会ったら、メグミちゃんが来年から厄年だって言ってたから……やだ、圭ちゃんももうじき三十じゃない！メグミちゃんとかなんか、もう三人も子供がいて、なんだか来年もう一人増えるらしいわよ。でもねえ、姑さんがわがままな人で、メグミちゃんも気苦労が耐えないって、奥さんこぼしてたけど。ああ、でもいいわねえ、孫がもう四人ですって。あら、そういえばあそこにはお兄ちゃんもいたはずだけど、そういうば全然聞かないわねえ。圭ちゃん、知ってる？」

「あ、あの、伯母さん、それで用は何？俺、もう仕事で出かけなきゃならないんだけど……」

圭は恐る恐る言っではみたが、伯母の耳には届かない。

「まあ、よそんちの子はこの際どうでもいいわ。圭ちゃん！あなたよ、あなた！一体この先どうするつもりなの？もう、三十歳になるのよ！いくら男でも、三十五歳過ぎたら、まともなお見合いの話だつてこなくなるのよ……。大体、自衛隊に入るなんてきいた時から伯母さん不安だったのよ。てつきり圭ちゃんは、お父さんと同じ外交官の道を進むもんだとばかり思ってたから……。それが、自衛隊よ！もう、何のために小学校のころから家庭教師をつけてきたのか分からないわ。それが、勝手に自衛隊入ったと思ったら、今度は

突然自衛隊やめてアクションスターになるだなんて言い出して……。そりゃ、圭ちゃんも亡くなったお父さんに似て運動神経が並外れていい子で、運動会なんかじゃ伯母さん随分鼻が高かったし、身長があつて見栄えもするから、伯母さんもしかしたらスターになっちゃうんじゃないかなって、期待はしてたけど。やっぱり運動神経があつて、背が高いだけじゃスターにはなれないのよ。伯母さん、芸能界の事はよく分らないけど、圭ちゃんよりよっぽど見劣りするような人がテレビに出てるのを見ると、やっぱりなんていうの、努力とかそういうことだけじゃダメなんじゃないかと思うの」

痛いところをつかれた圭は、うなだれてしまった。

「そんなの、分かつてるよ……」

「ね、だからお願い。もう、いい加減気が済んだでしょ。ほんとにこのままじゃ天国にいる……。あら、うちは仏教だから極楽って言わなきゃいけないのかしら？」

「あの、それはどっちでも……」

「とにかく！圭ちゃんが早く一人前になってくれないと、早くに亡くなった妹夫婦に申し訳がたたないでしょ！そりゃ、うちには子供がいなかったから圭ちゃんがきてくれたのはありがたかったけど……」

「伯父さんと伯母さんには感謝してるよ……」

「いい、とにかく一度帰ってらっしゃい！まったくこの子は、お彼岸もお盆も関係なんだから。たまには、きちんと両親のお墓参りくらいしなさい！それに……」

急に弾丸トークの速度が落ちた。

「それに……。ちょっと話したい事もあるのよ。だから、とにかく一度帰ってきなさい」

「話って？」

「電話じゃ言にくいわ」

弾丸トークの安子伯母さんですら、電話で言にくいこと……。わかった。時間を作ってできるだけ早くに帰るよ。ごめん、俺今

から仕事だから電話切るよ」

「待ってるわよ。ほんとに、できるだけ早く帰ってきてね」

「うん。じゃあね」

電話で言いくいことってなんだろう？

「先輩、やつぱなにかあったんじゃないっすか？」

黙りこくっている圭を、心配そうにタカシが見上げた。

「皆さん！そろそろスタンバイお願いします！」

番組のアシスタント・ディレクターが大部屋に向かって声を張り上げた。姿は見えない。奥の奥にある大部屋まで来るのが億劫らしい。いつもの事だと思いながらも、やはり圭は釈然としない。

予定ではとくにジャッキー・チェンとダブル主演で映画を撮っているはずだったのにな……。

「先輩、急がないとやばいっすよ。先輩、俺らより支度に時間かかるんっすから」

ぼけっと入り口のドアを見ていた圭に、タカシが声を掛けた。

「ああ、そうだな」

いいながら、目深に被った帽子を取ろうとして、圭は手をとめた。売れない役者とはいえ、圭も芸能人のはしくれである。やみくもに今の自分の顔を人前にさらけ出すことにはやはり抵抗があった。

「先輩、額のアせもの痕、まだ治ないっすか？」

「ああ、涼しくなっただいぶ落ち着いてはきたんだけどなあ。それより、こっちはもつとすごいんだぜ」

そう言っつて、圭はシャツを抜いだ。

そこには……、背中といわず腕といわず、体のありとあらゆるところにアせもの痕。しかもアせもの痕とともにちらほらと現役続行中のアせもある。

さらに……、体のあちこちが見るからに痛々しく腫れ上がっている。加えて無数の青アザと擦り傷。

「額のアせもは、なんとか収束しそうだけど……」

圭は、自分の体を恨めしそうに見ながら言った。

「こっちは、当分無理だな……。なんとか顔にだけは傷をつけないように頑張ったんだけど、それが結局裏目に出たんだよなあ。顔をかばうあまり、顔を隠すことに神経がいかなくてさ……。それで結局取り直すことになったしまった」

「そんなに何度も落ちなくても。適当に編集すればいいじゃないっすか」

「お前わかってないなあ。階段落ちは、ワンカットで撮るからこそ、迫力が出るってもんだろっか」

「そうっすかねえ。大体いまどきそんなのCGとかでなんとかなるんじゃないんっすか？」

「お前、そんなこと言ったら、俺たちの仕事がなくなっちゃうだろうが。第一、人の熱のこもったアクションがCGで表現できるはずはないだろう！画面に血が通ってなきゃ、人は感動なんて出来ないんだよ！」

「だからって、階段落ちを素直に十七回もやる人なんていまどきいないっすよ。やらせるほうもやらせるほうっすけど、やるほうもやるほうっすよ。まったく。映画監督なんつてのは年寄りだから、新しい技術についていけないのは仕方ないっすけど。先輩まだそんなに年じゃないのに、頭固いっすよ」

「ああ、わかった、わかった。どうせ俺はいまどき珍しい人間だよ。どうせもうすぐ三十だよ。頭ん中は若年寄りだ。生きた化石だ、ピラルクだ」

「ピラルクってなんっすか？」

「だから生きた化石だよ」

「生きた化石って？」

「ずっと昔から進化しないで今に至ってる生き物のことだよ」

「ああ、じゃあ先輩にぴったりっすね」

「どういう意味だよ！」

「先輩が自分で言っただんじやないっすか」

「ああ……。まあな……」

「でも、先輩はすごいっすよ。カッチャレンジャーでは、ちゃんと役名もセリフもあるじゃないっすか。俺なんて、毎回毎回『キキー！キキー！』しかないですもん」

タカシはおどけてジャラクターの決めポーズ（？）をした。

「そう言ってくれるのはタカシだけだよ」

見慣れているはずのジャラクターのポーズだったが、なんだか妙におかしくて、圭は笑いながらメイクルームに向かった。それに、盛り上げてくれようとするタカシの気持ちがあうれしかった。

四

彼は同じ場所に長く留まることはない。そう、長くても三日。

ここ三ヶ月で彼が訪れた場所は、二十ヶ所をくだらない。パリ・イスラマバード・北京・ウィーン・ラングレー・ダブリン・モガデイシュ・ロンドン・カイロなど。度合いこそちがえ、いずれもキナクサイ。実際、ここ三ヶ月で暗殺やテロ事件が発生した場所ばかりであり、しかも、事件の翌日には必ずその街に彼の姿があった。

彼が移動に選ぶのは、最短・最速ルートとは限らない。パリ・ロンドン間をユーロスターや飛行機ではなく、ローカル線を使い継ぐなどという事もしばしばである。その距離と移動時間を察すると、三ヶ月間の彼の行動の異常さが見えてくるだろう。

モスクワ・ルビヤンカ広場にいた彼は、翌々日にはベルリンにいた。

彼はベルリン・テゲル空港でタクシーに乗り込むと、真っ直ぐに中心街にあるホテルへと向かった。

ポツダム広場に面した五つ星ホテル。オープンしたてだというのに、男は慣れた様子で最上階のスイートルームへと入っていった。

近代的な外見とは裏腹に、シックな様式でまとめられた室内。三

十畳はあろうかと思われるリビングルーム。さりげなく配置されているドイツ最高級家具コア社のソファ。そこには、ボンドガールばりの美女がものうげに座っていた。

五

すっかり暗くなってしまった撮影所の廊下を、ヴィルト・カッツエはとぼとぼと歩いていた。

打ち身と擦り傷で痛む体のせいで思ったような動きができず、今日はNGを連発してしまった。

「おまえやる気あんのか？他のやつに役まわすぞ！」

監督の怒声が、頭をよぎる。

「このボケカス！いい気になるなよ！おまえの代わりなんか、いくらでもいるんだからな！」

代わりはいくらでもいる……か。

圭は普段相当なお気楽者で、あまり物事を悪い方に考える性質ではない。が、さすがに今日は落ち込んでいる。

それにただでさえ体に張り付いてキツイスーツが、打ち身の腫れを締め付ける。一歩足を出すたびに体中に激痛が走る。

俺、何やってるんだろ？

伯母の声が耳に響く。『努力とかそういうことだけじゃダメなんじゃないの』。

この状況で思い出すにはあまりにもキツイ一言。

伯母さんの言うとおりかもしれない。それに、もう三十歳か……。

圭は、体と心の痛みに耐えかねて、とうとうその場に座り込んでしまった。うなだれたまま動こうとしない。いや、動けない。ただ、涙が頬をつたった。それがまた悔しくて、ますます心は行き場をなくしていった。

そのとき、暗い廊下に足音が響いた。

「そこにいるのは圭か？そんなところでなにしてるんだ？」

声をかけてきたのは、トクさんこと徳永だった。圭の事務所の先輩俳優である。もつとも同じ事務所とは言っても滅多に顔を合わせたことはなく、あまり親しく話をしたことはない。

圭は、うつむいたまま慌てて右手で涙を拭った。右手のグローブには、涙で落ちたマスカラとアイシャドーがべっとりついた。

「どうした？なにかあったのか？」

徳永は、ゆっくり圭の隣に腰をおろした。

徳永は五十八歳。二十三歳の時からこの世界に身を置き、スタントマンやスーツアクターとして活躍してきた。一部のマニアの中では時代劇の「斬られ役」として有名だが、一般の人はその存在をほとんど知らない。

今日は極道ものの撮影でここに来ていた。「撃たれて」きたらしい。イカニモなかんじのスーツの左胸には小さな穴が開き、口元にはべったりと血のりがついている。

徳永は、普段は決して口数の多いほうではない。口ではなく背中でものをいうタイプの古い男だ。

圭の右手のグローブについた汚れが目に入ると、大体のことは察することができた。いや、察するというよりもそれは徳永自身が経験してきたことなのだ。

「どうだ？」

徳永はポケットからタバコを取り出した。圭が一本タバコを引き抜き口にくわえると、火をつけてやった。

圭はうつむいたまま、黙ってタバコをふかしてる。

「聞いたよ。階段落ち十七回もやったって？」

圭は小さくうなずいた。

「監督に、フィルムの無駄使いをさせられたって嫌味をいわれました」

消え入るように言った圭の言葉に、徳永はなぜか大声で笑い出し

た。

「お前、もしかして、そんなこと真に受けたのか？」

「?.....」

「いくら堅物の監督だからって、出来ない奴に十七回もやれなんて言わないぞ」

「でも、できないから十七回もやったんじゃない.....」

「それは違うな」

「?.....」

「お前ならできるから十七回もやらせたんだ」

「?.....」

「お前の根性をかったからこそ、最高のシーンを撮りたかったんだよ」

「トクさん.....」

圭はようやく顔をあげた。オネエメイクが涙でボロボロになっている。それなのに、涙で潤んだ瞳はまるで子犬のようで、その対比に徳永は笑いそうになるのを必死に堪えながら言った。

「お前、そんなこともわかってなかったのか？」

「.....」

「大方今日だって、お前の代わりはいくらでもいるとか言われたんだろう？」

「.....」

「そんなのはな、この世界じゃただの口癖なんだよ。真に受けてるほど芸暦は浅くないだろう？」

「そうですね。なんだか今日はグサつときちゃって」

圭は伯母の安子の顔を思い浮かべた。

「実は、今日伯母に、いい年していつまでこんなことやってるんだって言われちゃって.....」

「伯母さん？」

「ええ、親代わりなんです。母の姉なんですが、十歳の時に両親をなくしてからずっと育ててもらって」

「お前、そんなに早くに親を亡くしたのか？」

「ええ。テロで……」

「テロ？」

「はい。二十年前におきた」

「あ！覚えてるよ。あん時やすごかった」

「僕はちょうど学校に行っていて助かったんですが、両親は……」

「お前、以外と苦労してるんだな……」

「その時、悪と戦おう、絶対に悪は許さないって決めたんです。けど……」

「けど？」

「子供だったんですよ。伯母たちがとめるのも聞かないで、高校卒業してすぐに自衛隊に入って」

「自衛隊？そりやまた突飛だな」

「ええ。自衛隊って国を守って世界の悪と戦う組織だっと思ってたから……」

「あ！お前かあ！」

それまでしんみりと話を聞いていた徳永が、突然すっとんきょうな声を出した。

「そういや、うちの事務所に自衛隊あがりのやつがいるって聞いたことがあるけど。そうかお前だったのか……。てことは、射撃でオリンピックに出たってのもおまえか？」

「いえ候補にはなってましたけどオリンピックには行ってません。

いろいろ事情があって……」

「そうかい。でも大したもんだよ。候補になるだけでも立派なもんだ。普通の人間にや、なかなかできないぞ。な、もっと自分に自信をもて！」

いいながら、徳永は圭の顔をじっと見つめた。見つめたはいいが、メイクのくずれたその顔に我慢しきれずにとうとう大げさに笑い出してしまった。

「とりあえずお互いにメイクを落として、着替えようぜ。この続き

は酒を飲みながらでもゆつくりしよう。こんな暗いところでオカマの化けもんと死体が話してたんじゃ、コントにもならねえぜ」

徳永は立ち上がると、圭の手をとった。

「ほら、頑張つて立ち上がれ！うまいもん食わせてやるから」

その言葉に安心したように、圭の目からは再び涙がこぼれた。

「オカマの涙なんて、俺には興味ないぞ。ほら、根性出せ」

徳永にうながされてようやく圭が立ち上がると、二人は暗い廊下を控え室の方へと歩いていった。

「急がなくていいぞ」

そう圭に声をかけながら、徳永は先にシャワー室をでた。

「はい。すいません。少し待ってて下さい」

なにしろ、圭の衣装は収縮性の強いラバー素材で出来ているので脱ぐにも着るのにも時間がかかる。その上、壁のようなオネエメイクを落とすのも大変だ。

徳永はゆつたりと椅子に座ると、タバコに火をつけた。が、ふと化粧のくずれたヴィルト・カツエの顔を思い出して、一人で笑い出した。

写真にとつときや良かったな。でも、そんなこと言ったら、圭に怒られるか……。それにしても、あの顔つたらなかったな。あれ、そっぴいやって、本当はどんな顔をしていたっけ？

思い出そうとしても、どうしてもメイクのくずれたヴィルト・カツエの顔しか浮かばない。しばらくして、一人で笑っている徳永の背中に、シャワーを浴び終わった圭が声を掛けた。

「お待たせしました」

その声に徳永が振り返ると、年の割にはおさない笑顔を見せる、さわやかな好青年が立っていた。

三つ揃いのスーツにトレンチコート、皮の手袋。

その男は小雨の降る石畳の古い町並みを、彼独特の歩幅の広い優雅な足取りで歩いていた。

ボルサリーノを深く被り、サングラスをしたその顔からは、やはり表情は読み取れない。

しかし、「東欧の真珠」「ドナウの薔薇」と称されるこのブダペストの風景さえもが、まるで彼のためにあるかのような出で立ちである。

彼は、ブダ地区にあるハンガリーでもっとも由緒正しいホテルにチェックインすると、やはり慣れた様子で部屋へ向かった。

青とベージュを基調としたアルデコスタイルの部屋に入るなり、彼は大きな窓に掛けられていた厚手のカーテンをしつかりとしめた。その窓からは宝石のようなブダの街を一望できるにも関わらず……。

雨に濡れたトレンチコートとボルサリーノを壁にかけると、彼はバスルームへと向かった。冷えた体を温めるために。

それでも、ほんの十分ほどで彼はバスルームから出てきた。ホテル仕様の厚手の白いバスローブに身を包み、濡れた髪をタオルで拭きながら。

当たり前だが、さすがにサングラスはしていない。なので、ここに来て、ようやくはつきりとその表情を伺うことができる。

身長一八五センチの長身に、細すぎない筋肉質の体、それだけでもよく似ているのに……。後ろ姿などは見分けがつかないほどののに　サングラスを外したその顔！

その雰囲気こそ全く異なれ、彼は圭と瓜二つであった！

第二章 K

—

「へえ、先輩そういう格好してると、まるで売れっ子のモデルみたいすね。すげえカッコいいすよ」

某テレビ局の一室。衣装合わせをしている圭の横で、タカシは感嘆の声を上げた。

「よせやい！照れるじゃないか。でも、ま、これが真の俺の姿だ。まったく、みんな俺の使い方間違えすぎてたぜ。ま、額のアセももうやく消えたことだし。これからはどんどん顔売ってくぞ」

今までに着たことのないような高級スーツに、トレンチコートをはおりながら圭はまんざらでもなさそうに言った。

今回の圭はおかまのヴィルト・カツツエでも、顔を映してはならないスタントマンでもない。とは言っても、役どころはいつもとあまり代わり映えがしないが……。

一仕事終えて、これから高飛びをしようとしている巨大窃盗団の一人。追ってきた刑事と派手な格闘を繰り広げた上で、捕獲される予定。

「いや、でもマジカッコいいすよ。この人が、実はヴィルト・カツツエと同じ人だなんて、絶対誰も思わないす。いや、見違えるって、こういうことをいうんすねえ」

タカシも窃盗団の一員の役をつかんで、この作品に出演することになってる。もっとも、彼の衣装はチンピラ風スタイル。窃盗団の中でも下っ端らしい。やっぱりエキストラと変わらない程度のものである。

「こういうの『マゴニモイショウ』っていうんすかね」
「おだまり！」

圭はふざけてヴィルト・カツツエの口調で言った。

横で会話を聞いていた六十がらみの衣装さんが、思わず噴出した。
「それじゃ、『馬子にもう一丁』」

衣装さんは笑いながらそう言つと、ボルサリーノを圭に差し出した。
「それを被つたら、お前さんもつと男前があがるぞ」

衣装さんの言つたとおりだった。どちらかというと童顔で甘めの顔をしている圭だが、ボルサリーノを被るととたんに大人の男の渋さが出た。

「へえ、やつぱり役者さんだねえ」

思つた以上のできればに、思わず衣装さんも目を見張つた。

「やつぱり、は余計ですよ」

圭はいたずらつぱい目で衣装さんをにらむと、背筋を少し丸めてトレンチコートの襟を立て、たばこに火をつけた。

「『ルイス、これが美しき友情の始まりだな』」

圭がヴィルト・カツツエとは正反対の低い声で言つと、

「『君の瞳に乾杯!』」

衣装さんも、呼応するように渋い声を出した。

「なんつすか? それ? 男に向かつて気持ち悪くないっすか?」

タカシがクビをひねりながら聞いた。

「知らないのか?」

圭はびつくりして言つた。

「知らないっす」

「カサブランカだよ! ハンフリー・ボガード!」

「なんつすか? それ? それも生きた化石の一種っすか? そういや昨日、テレビで『生きた化石の世界』って番組やってましたけど、先輩見ました?」

「『昨日? そんな昔のことは忘れたよ……』」

さすがにこのセリフはタカシだって知っているだろうと圭は思つた。

「やばいじゃないっすか先輩! 昨日のことくらい覚えてないと!」
タカシの表情は、真剣に圭を心配している。

「……………」

さすがの圭も疲れてきた。

「まあまあ。いまどきの若いものは知らないんだろ。昔はボギーって言えば、男の代名詞だったのになあ。それが、今じゃ化石扱いか……………」

衣装さんは少しさびしそうだ。

「ああ、そうそう忘れるところだった。これもだ」

そう言うとき衣装さんは申し訳なさそうに、圭にサングラスを渡した。

「……………」

「高飛びしようとしてる犯人が、堂々と顔出してちゃまずいからな」

「そう……………ですね。そりゃ、そうだ」

笑っているつもり圭の顔が、微妙にひきつっているのを、タカシは見逃さなかった。

「先輩、なんだかますます渋いつすよ。男っぷりがあがったつす。俺なんてサングラスなんてカッコいいもんじゃなくて、これっすよ、これ」

そう言うときタカシが、規格外のばかでかいマスクを掛けると、衣装さんともども圭は腹を抱えて笑い出した。

「よくこんなの作りましたねえ。これじゃ口さけ女ですよ」

つばにはまったのか、圭は笑いすぎてしゃっくりを始めた。

「なにも、そこまで笑うことないじゃないっすか」

タカシは少しふくれつつらだ。もっとも、マスクで隠れて見えはしないが。

「悪い、悪い。でも、そのマスク、インパクト抜群だぞ。一度見たら忘れられない。『マスク・オブ・ゾロ』を凌ぐ、『マスク・オブ・タカシ』ってとこだな！」

「先輩、それ全然誉め言葉になってないっすよ」

「やっぱり？」

タカシは深くうなずいた。

「あ、ところで先輩は明日何時入りつすか？一緒に行きましようよ」
圭はサングラスを掛けながら言った。
「『明日？そんな先のことはわからない……』」

二

永世中立国スイス・チューリッヒ中央駅。その男はいつもの井出立ちでホームに立っていた。
雪を頂いたアルプスの絶景も、やはり彼の前では、ただの風景にしか見えない。
スイスらしく時間どおりにやってきた電車に、彼はゆったりといつも優雅な足取りで乗り込んだ。電車の行き先は チューリッヒ国際空港駅。

三

成田空港・第一ターミナル四階の国際線出発ロビーでは、映画のロケが派手に行われていた。
「よい！本番スタート」
監督の掛け声と共に、幾人もの役者が動き出す。例の衣装を身にまとった圭とタカシも例外ではない。
ゆったりとロビーを歩く窃盗団のボス。もちろん、超有名人気俳優が扮している。ボスを警護するように、その真後ろを歩く圭たち数人。全員がピシッとした、スーツスタイルだ。どうやらボスの側近らしい。
圭たちから少し離れたところをちょこまかとせわしく歩くタカシたち数人は、やはり下っ端のようだ。みな、チンピラ風の衣装をまとっている。

ふと気配に気づいて、ボスは立ち止まって後方を見やった。そこには、知名度抜群の売れっ子俳優扮する刑事の姿が……。

「しまった！」

ボスの声に、慌てて後ろを振り返る圭たち。

「逃げる！」

叫びながら慌てて走り出すボス。ボスについて行く圭たち護衛軍団。圭たちとは別の方角に逃げて散っていくタカシたちチンピラ軍団。

「待て！」

ボスを追って刑事も走る。

「待て！待つんだ！もう後はないぞ！あきらめろ！」

いつの間にかあちこちから警官がゾロゾロと出てきて、その数は窃盗団を超えた。タカシたちチンピラ軍団は、すでに確保されつつある。

ボスと圭たちが逃げていく前方にも警官たちが……！囲まれてしまった。もう逃げ場はない。

「なにをコラア！」

ボスを守ろうと、雄たけびをあげながら警官たちに向かっていく圭。複数の警官を相手に、一人孤軍奮闘の大立ち回りを演じる。長い足で、回し蹴りを繰り返す。が、ひらりとよけた警官のパンチが、圭のみぞおちに入って、あっさりとノックアウト。倒れるように床にくずれおちたら、あとは刑事とボスの芝居が終わるまでじっとしていなくてはならない。これが以外と、ツライ。

四

機内から空港へと続くボーディングブリッジに、真っ先に姿を現したのはその男だった。どうやらファースト・クラスを利用したらしい。

足早にボーディングブリッジを渡りながら、彼は左手に巻いたドイツ製の超高級ブランド、ランゲ・アンド・ゾーネの腕時計に目をやった。

風の影響で、飛行機の到着は一時間ほど遅れている。待ち合わせの時刻に間に合うかどうか……。

ボーディングブリッジを渡り終え人気がない通路に出ると、彼の歩みは早歩きから小走りへと変わった。

五

「カーツト！よし！今日はここまで！」

監督の声が空港のロビーに響き渡った。

その瞬間あちこちで転がっていた窃盗団の団員が起き上がり、近くにいた警官たちと談笑しだした。

うつ伏せに倒れていた圭が起き上がると、目の前にボス役俳優が立っていた。

「お前、いい動きしてるな。回し蹴りなんて最高に決まってたぜ。空手かなんかやってたのか？」

「あ……、いや……、あの」

大物俳優に突然話しかけられ、緊張のあまり圭の口からはうまく言葉がでない。

「いい感じだったぜ。ま、頑張れよ」

そういつて圭の肩を軽く叩くと、ボス役俳優は監督の方へ歩いて行った。

「すごいじゃないっすか！あの人に誉められるなんて。滅多に他の役者の事を誉めないって、有名なんっすから」

いつの間にか圭の傍に来ていたタカシは、まるで自分が誉められたかのようにはいしゃいでいる。

圭は感動のあまりしばしボー然。

「先輩、良かったっすね」

タカシは床に落ちていたボルサリーノを拾って、圭に手渡した。

「ああ、なんか俺……、自信着いてきた！」

そう言う圭はボルサリーノを粹に被ってみせた。

「やつぱり先輩、かつこいいっす！」

「よせやい！照れるじゃないか。それより、これからどうする？メシでも食ってから帰るか？おごってやるぞ」

万年金欠状態の圭だが、後輩には気前がいい。さらに今は近年まれにみるほど気分がいい。最もおごるとは言っても、牛丼程度の話ではあるが……。

「あ、すいません。俺、このあとまだ成田で、エキストラのバイトがあるっす」

「そうか。じゃまた今度な。成田空港なんて久しぶりだから、俺はちよつとウロウロしてから帰るよ」

「そうっすか。それじゃ、また」

タカシはキチンと圭に一例すると、足早に去っていった。

六

成田空港・第一ターミナル一階の国際線到着ロビーに、その男はいた。

彼は腕時計をちらちらと見ながら足早に歩いている。もともと歩幅の広い彼が足早で歩くと、そのスピードは結構なものだ。

彼はわき目もふらずに歩いていたので気づかなかったが、途中幼稚園の遠足と思われる一行とすれ違った。もちろん幼稚園児が海外旅行から帰ってきたわけではなく、ただの見学だろう。

と、突然、一人の男の子が列からはずれて彼を追って走ってきた。が、幼稚園児が追いつけるスピードではない。彼はどんどん遠ざかっていく。

それでも男の子は諦めず、とうとう叫びだした。

「待ってー！ヴィルト・カツエ！待ってー！」

その声に、他の幼稚園児も一斉に反応して走り出した。

声に驚いて後ろを振り返った彼の眼に映ったのは、必死の形相で彼に向かって走ってくる幼稚園児の集団だった。

いったい、なにごとだ？

いぶかしいとは思ったが、まさか自分が関係しているとは思わずに、彼はさらに歩調を早めた。

「待ってー！ヴィルト・カツエ！」

しかし、その声は一丸となって彼の背中に向けられた。

あちこちで子供の泣き声が聞こえてきた。走っているうちに転んだらしい。その痛ましい光景に胸を痛めたのか、とうとう若い女性の保育士が怒鳴りだした。

「こら！その変な帽子の男！止まりなさいよ」

変な帽子？

よもや自分のことではあるまいと思いながら、彼が再び後ろを振り返ると、

「そう！あなたよ！あなた！」

保育士は彼を指差して、絶叫した。

私……？

その瞬間さすがに彼の足が止まった。そして……、彼はあつという間に幼稚園児たちに囲まれてしまい、身動きがとれなくなってしまった。

七

圭は成田空港を文字どおりウロウロしていた。しかも、衣装のままで。何しろ、普段は絶対に着られないような上等なスーツを着ているのだ。圭は、せっかくだからもう少しこの格好でいたかった。

時々、通りすがりに訝しげな顔をする人もいる。もしかしたら、どごその組の人と間違われているのかもしれない。なんといっても、今時日本でボルサリーノを被っている人になんて、まず滅多にお目にかかれない。しかも、この寒空にサングラス。怪しい……。最も、もともとその手合いの人物の衣装なのだから、ごく自然なことではあるが。

それでも、今日の圭はなんといっても気分がいい。皆の視線さえ、もしかして、俺って思ったより有名人？と勘違いできるほどに。

それにしても、成田空港もすっかり変わっちゃったんだな。もう、どこがどこだか全然分らないよ。

成田空港へはロケなどでも何度か来てはいるが、なんだか来るたびに変わっているような気がする。

軽く迷子だな、こりゃ。ま、いいか。今日はバイトもないし……。

圭はおのぼりさんよろしく、物珍しそうに周囲を見ながら当て所なく歩いていった。

ああそうだ、そういや、帰りは何で帰ろうかな？成田エクスプレスは高いし、京成だと乗換えが面倒だしなあ。

そんなことを考えながら、ぶらぶらと歩いていると、自動ドアの向こうにバス乗り場が見えてきた。

ああ、バスか……。そうだな、バスで帰るか。どうせこまで来たんだ、着替える前に場所を確認しとこうつと。

そう思っただけで空港ビルから外に出ると、そこには二十近いバス乗り場が存在していた。

えーっと、新宿行きは？

圭は、きろきろと周囲を見渡した。

あ、あつちか。いや、待てよあつちにもある……。なんで二つあるんだ？

お目当ての新宿行きのバス停は、バス乗り場のほぼ中央にいる圭

の、右側にも左側にもあった。

まあ、いいか。取り敢えず右に行ってみよう。

圭は何気なくそう思って、右手にあるバス停へと歩き始めた。圭の向かったその前方には……、黒塗りの高級車が停まっていた。その車には運転手を含めて二人の男が乗っている。いずれも黒尽くめの服装。サングラスこそしていないが、「ニセモノ」の圭とは違って、かなりその筋のホンモノ感が漂っている。

「岩本、見えるか？」

後部座席に乗っていた若頭風の男が、運転席の若い男に声を掛けた。

「はい、大杉さん。自分は遠視ですから良く見えます」

「そうか。見逃すんじゃないぞ」

言いながら大杉も、前方に目を光らせている。

岩本も、ひっきりなしに往来する人物を、一人一人注意深く見ていた。すると、

「あ、あれじゃないですかね」

と、少し裏返った声で言った。

「ど、どこだ？」

その岩本の言葉に、大杉は色めき立った。

「ほら、あそこですよ。今、七番のバス停の前にいる男です」

岩本が指差した先には……、圭の姿。

「トレンチコートにボルサリーノ、サングラス。顔立ちもええっと」
言いながら、岩本は一枚の写真を見つめた。

「間違いありません。あの男です！」

圭はゆっくりと、車の方に近づいてくる。

「時間どおりだな。よし、行け！」

時計を見ながら大杉が言うと、岩本は急いで車を降りて圭の方へと向かって行った。岩本は圭の前まで来ると、その正面に立ちはだかった。

「あの？何か？」

突然のことに圭はたじろいだ。何しろ、岩本の服装は分かりやすい。

「ケイさん、ですよね？」

「ええ……、そうですね……？」

圭はわけが分からず困惑していたが、その様子を気に留める風もなく、岩本は一枚の紙をポケットから取り出した。

「これからどちらへ？」

紙をちらちらみながら、問い詰めるように岩本は聞いた。

「あの……」

岩本は、それがクセになってしまった「メンチ」をきるように圭を見つめている。圭は怖くなって、少しうわずった声になった。

「し、新宿へ……」

「そうですね」

新宿と聞くと、何故か岩本はほとした表情になった。が、次の瞬間また真剣に紙を見つめながら言った。

「それならば、新宿までお送りしましょう」

「？……」

「新宿からはどちらへ」

「あ、あの、な、中野ですけど……？」

圭のとまどいは増すばかりだ。しかしなぜか岩本はその言葉を聞くと、ほっとした顔をして満足気にうなずいた。そして、後方を振り返り大杉になにやら合図をすると、圭を車に誘った。

「さ、こちらへどうぞ」

「こちらって？」

「車を用意してあります」

「車……？」

「はい。ささ、お疲れでしょう。どうぞ、どうぞ」

うながされて訳も分からぬまま、圭は取り合えず岩本の後を着いて行った。

圭が車の前まで来ると、後部座席のウィンドーがゆっくりと開い

て、中から大杉が顔を出した。

「どうだ？」

「へい。ばっちりです」

岩本は持っていた紙切れを振りながら言った。その紙切れには、小さく「新宿・中野」と書かれていた。

「そうか。それはよかった」

岩本が後部ドアを開けると、大杉が中から出てきた。

決して大きな男ではない。むしろ大杉は貧相な部類に入るだろう。しかし全身からかもし出される「ホンモノ」の雰囲気は、岩本の比ではない。圭はその雰囲気、恐れをなした。逃げ出したかったが、足がその場にはりついて動かない。それに、ヘタに動いたら後ろからドスンということにもなりかねないと思った。

圭ちゃん、強盗にあつたら素直にお金を出すのよ。いいこと、決して抵抗しちゃダメよ。いいわね。

今は亡き母の声が頭をよぎる。

「ボスがお待ちです。さあこちら」

どうやら大杉は、圭に車に乗れと言っているらしい。

「ちよつと待って下さい。あの、ボスって……？」

恐る恐る圭は、聞いてみた。

「あ、今の世の中じゃボスと言っではいけないでしたっけね。いけませんな。つい、長年のクセが出てしまつて。さ、櫻井会長がクビを長くしてケイさんのこと待っております。なにしろ、うちのボ……、じゃあねえや、会長はケイさんがえらくお気に入りで……」

自分たちもケイさんの活躍の程を、毎日耳にタコができるくら聞かされております次第です」

「活躍？」

「そうです。世の中い奴ばかりに人気が集まるが、それだけじゃ世の中回らねえ。『本当の美学は悪役にある』って。それが会長の信念です」

「『本当の美学は悪役にある』……」

そうつぶやいた圭は、ようやく納得のいく顔をした。

「わかって頂けましたか？」

うなずきながらも、圭は念のためと思い、謙虚に聞いてみた。

「あの、もしかして、会長さんって俺のファンなんですか」

「もちろんですよ！会長はあなたのファンなんです」

大杉はなにを今更といった表情だ。

「いや、ファンなんてもんじゃありませんよ。大のつく大・大・大ファンです。ですから、ささ、早く車にお乗り下さい」

『大ファン』という言葉ですっかりいい気になってしまった圭は、大杉にうながされるままに後部座席に乗り込んだ。荷物も持たずに、衣装のままでということさえ、すっかり忘れて……。

少し離れた別々の場所で、その様子を伺うようにとまっている二台の車があった。一台は真っ赤なスポーツカー。もう一台は年代物の白い国産のセダン。

圭を乗せた黒い高級車が動き出すと、それに呼応するように、二台の車も静かに走り出していった。

八

圭を乗せた車が去って行った直後、その男はバスターミナルに走りこんできた。しかし、注意深く辺りを見回してみたが、それらしい車がない。

彼が腕時計に目をやると、無常にも約束の時間を五分過ぎていた。彼は内ポケットから携帯を取り出して電話をかけると、話しながら仕方なくタクシー乗り場の方へと歩いていった。

電話の相手は男だった。落ち着いて凜とした声。年は……、若くはないだろう。

この時間に君から電話がかかってくるとは……。
……。

珍しいこともあるものだな。

……。

『カミカゼ』がしくじるとは……いや……、コードネーム『K』！

第三章 I（前書き）

第三章 I

第三章 I

—

圭を乗せた車は成田空港を出ると、高速には入らず一般道を走っていた。

車が赤信号で止まると、後部座席から大杉が岩本に声を掛けた。

「ぼやぼやしてないで、なにか冷たいものでもお出ししろ」

「へい」

うながされて、岩本は助手席に置いてあつたクーラーボックスから缶ビールを取り出すと、缶のふたを開けた。すると、そのとたんに、ビールの泡が勢いよく缶から吹き零れた。

「なにしてるんだ！」

「へい、すみません」

「よく拭けよ！」

岩本はあわててポケットからハンカチを取り出すと、缶のまわりを拭いた。そして拭きながら、ハンカチで隠していた小さな容器に入った液体を数滴缶の中に垂らし、それを大杉に渡した。

「さ、まずは一杯どうぞ。お疲れになつたでしょう」

「あ、すいません。乾燥してるせいか喉がからからだったんです。じゃ、遠慮なくいただきます」

うれしそうにビールを受け取り、大杉に軽く頭を下げると、圭は半分ほどを勢いよく飲んだ。

「いや、うまいっすね」

「そうですか。そいつは良かった」

大杉の目がキラリと光る。

「そっぴや（飛行機の）時間が遅れてるってんで、心配してたんですよ」

「いや、あの程度の（撮影の）時間の遅れなら日常茶飯事ですよ。」

今日なんかはいい方です」

「そうですか。そんなに遅れるものなんですか。それは大変ですねえ」

「ええ」

余程、喉が渴いていたのか圭は残りのビールを一気に飲み干した。

「平気で半日位は遅れたりしますから」

「半日もですか？」

「天候に結構泣かされるんですよ。風が強かったり、雷雨だったりすると、その日はもう諦めるしかないなんてことも、わりとありますから」

「成る程。それはそうですね。なんたって、そんな日に無理をしたら危険だ」

「ええ……」

そう頷いた圭は、突然そのままの格好で深い眠りに落ちていった。大杉が軽く圭の頬をたたき、クスリの効果を確認すると、岩本はUターンして高速道路へと車を走らせた。

そして、高速のETCを抜けると、圭を乗せた車は「東京方面」とは別の方へと向かっていった。

どこに行くつもりかしら？

圭の乗った車を追って、その後を赤いスポーツカーが走っている。運転しているのは、ベルリンのホテルでKを待っていたあの女だ！頭にはヘッドセット、顔には大きめのサングラス。服装は、ラフなジーンズにスニーカー。

彼女のコードネームは……「I」。

それにしても、やっかいな人たちがついてきてるわね。

バックミラーには白い国産のセダンと、それに乗っている二人の男がうつっている。五十代半ばと、三十代半ばといったところだろうか。二人とも量販店で売っていきそうな、安物のスーツを着ている。しょうがないわね。

Iはスピードをあげて、白い車の前に入った。

ちよつと古典的だけど、結局これが一番きくのよね……。

Iがサイドブレーキの前にある丸いボタンを押すと、車体後方からなにか光るものが滑り落ちた。

Iはさらにスピードを上げた。その後方では白い車が急停車し、男たちが慌てて車の外に出てくるのがバックミラーに映し出された。どうやらパンクをしたらしい。

ごめんあそばせ。

Iがクスリと笑ったその時、携帯の着信音が鳴った。

「もしもし」

スイッチを入れて電話に出ると、みつみるうちにIの表情が変わった。

「まさか！そんなはずは！Kは確かに……。ええ、そうです。……なんですって！じゃあ、車に乗っているのは……？わかりました……」

Iは電話を切ると呆然としながら、前方を走る圭の乗った車を見つめた。

二

潮の香りがする。

懐かしいな。子供の頃よく父さんに連れていってもらった……。

圭は、はつきりとしなない意識の中でそんなことを考えていた。

「ご苦労だったな」

聞きなれない男の声だ。

「ボディチェックは済んだのか？」

「はい。ポケットから靴底まで調べましたが、見事に何も持っていない」

大杉はそう言うと、岩本と二人がかりで担いできた圭をソファ―

に下ろした。

「何も？それはいい度胸だな」

男はいかにも愉快だといった風に笑い出した。

「我々と接触するのに丸腰とは。しかし、却って懸命だな」

「はい」

「この男、私が考えていた以上に使えるかもしれん」

男は、圭の顔をじっと見つめて言った。

「ぐっすりとお休みのようだが、こちらも暇ではない。そろそろお目覚めになって頂かなくてはな」

そう言つて男が圭のほほを軽くたたくと、圭の瞳がうつすらと開いた。

「ミスターK。気分はいかがですか？」

ぼんやりとしたその視界に、見知らぬ男の姿が映った。

年は四十過ぎといったところだろうか。髪に白いものが、ちらほらと混じっている。大杉たちとは打って変わって、趣味のいいスーツを粹に着こなし、圭に向かって柔和な笑顔を見せている。

「余程お疲れだったのでしょうか。車に乗ると、すぐに寝てしまわれたそうですね」

「あの……、あなたは……？」

圭は、ふらつく体をなんとかソファアの上に起こした。

「私？」

男は圭の質問にニヤリと笑った。

「とつくにご存知でしょうか？」

「……？」

男の後ろに、ぼんやりと大杉と岩本の姿が見える。

『会長はあなたのファンなんです』

「あつ！あなたが櫻井会長ですか？」

圭は、とつさに姿勢を正した。

「そうです。大分意識がはつきりなさってきたようですね」

「はい。あの、ここは……？」

言いながら、圭は辺りを見回した。

二十畳ほどの室内は、どこかの高級ホテルの一室のようだ。

もしかして、これがスイートルームってやつかな？

その豪華さにとまどいを感じながら、圭は三方に大きくとられている窓に目をやった。すでに日は暮れていて、空には星が出ている。そして、その空の下には……。

「海？」

圭はおどろいてすっとんきょうな声を出した。

「そうです。ようやくお気づきになりましたか」

「あの……？」

よくよく耳を澄ましてみれば、波の音がする。それに……。

「なんだか、景色が変わっていつてるみたいなんですけど……」

「ええ、ついさっき出航しましたから」

「出航って？」

「ここはクルーザーの中ですよ」

「はあ……？」

「あなたをご招待するには、ここが一番都合がいいと思ひましてね」
「……？」

「何しろ陸だと『壁に耳あり』で、あなたとゆっくりおしゃべりを
楽しむこともできませんから」

圭は、櫻井のこの一言でなんとなく状況を把握した。

ああ、なるほど。

圭には金持ちのすることはよく分からないが、櫻井の気持ちは理解できるような気がした。

いい年してヴィルト・カツエのファンだなんて……。そりや
人に知れたら恥ずかしいもんな。

それなりに納得した顔をしている圭を見て、櫻井も満足気だ。

「ところで、失礼だとは思いましたが、あなたの事をいろいろと調べさせてもらいました」

やっぱりこの人、すごい俺のファンなんだ。

圭はうれしくなつて小さく笑みをこぼしたのだが、それが相手には不適の笑みに見えていた。

「もつとも、我々がいくら手を尽くしても、あなたの素性はわかりませんでしたけれどもね」

そうか、俺やつぱりぜんぜん売れてないんだ……。

圭は思わずうなだれた。が、相手にはそれが、下を向いてほくそえんでる様に見えていた。

「ただ、かなり不確定ながら、ひとつだけ情報が出てきました」

なに？ なに？ やっぱ俺、少しは認知されてる？

櫻井の次の言葉に期待して、圭は顔をあげて真っ直ぐに櫻井の顔を見つめた。が、それは相手にはにらみつけているようにしか見えなかった。

「幼いころ、不幸な事故でご両親を亡くされている」

男はきつぱりと言いつつ放った。

思いもよらぬ言葉に、圭は呆然とした。

「違いますか？」

圭の脳裏に父と母の顔が浮かび、目が自然と泳いだ。

「どうやら、凶星のようですね。実は、この情報は、私にとってあなたの本名や真のあなたを知ることよりも大切なのです」

「それは……、どういふことですか？」

「私が知りたいのは、なぜあなたが今のようない仕事をしているのです」

「なぜって……」

「ヒーローを気取るやつはたくさんいる。しかし、あなたはそんな単純な道を選ばなかった」

「いや、選ばなかったわけじゃ……。仕方がないんです。本当は、俺だってヒーローになりたかった……。でも……、俺はヒーローにはなれなかった……」

圭の言葉を聞いて、男は満足気にゆつたりとうなずいた。

「世の中には戦争反対と叫んでいれば、平和が訪れると思っている

輩がたくさんいます。しかし、叫んでいるだけではなにも起こらないのです。行動を起こさなければ。でも、その行動がいつもいつもヒーローのようだとは限らない。時には、その行動が罵られることもあるでしょう」

うなだれている圭に、櫻井は諭すように話しかけた。

「この世には光と闇があるのです。人はみな光に憧れます。しかし、真の正義は光だけではつくれません。闇があるからこそ光は美しいのです。真に勇氣を持っているものは、闇の世界に身を置く強さも持っています。しかし、それは実に大変なことです。余程の信念がなければ貫き通せるものではありません。あなたは幼い頃、非常に不幸な形でそのことを知ったのです。違いますか？」

「『悪の正義を貫くためには、人一倍悪を憎む気持ちが必要なのよ……』」

圭は、ヴィルト・カツエのセリフをつぶやいた。

「その通りです。やはりあなたは思ったとおりのお人だ。自分の役どころを、しっかりとらえていらっしゃる。私の目に狂いはなかった。この役を演じきれるのは、あなただけです」

言った櫻井も少し大袈裟だと思ったが、どうも目の前にいる男は、櫻井がイメージしていた精神的にタフな男とは違うようだ。故に、この男の場合は、少し鼓舞してやる必要があると思った。

「いや、それ程でも……」

そんな櫻井の思惑にあっさりはまった圭は、うなだれていた顔を上げて、櫻井に向かい照れたように微笑んだ。

それを見て、櫻井も安心したような顔をして、

「おい、それじゃ例のものを」と大杉に声をかけた。

「はい。それならここに」

言いながら、大杉はなにやら細長い革張りのケースを櫻井に手渡した。

「ご職業柄、いろいろないい物をお持ちでしょうが……」

そう言つて櫻井はケースの蓋を開けた。それを見て、

ああ、やっぱりこういうものも好きなんだなこの人。戦隊もの好きにありがちな趣味だよな……。

と圭は思った。

「いやいや、いくらこういう商売をしているからって、俺はそんなにいい物は持つてませんよ」

「そうですか？『いい物』はお持ちではない？」

男は少し怪訝そうな顔をした。

「ええ。姿勢の練習用に、安物が一つあるだけです……」

「練習用？それでは、本番の時には用意されたものを使うのですか？」

「そうです。まあ物はその時によつてまちまちですけど」

「なるほど……」

男はしきりに感心している。

「一流になる方は、やはり凡人とは違いますな。どんな物でも瞬時に扱えるとは」

「まあ、俺の場合は他の人と違って経験の仕方と数が違いますからこれなんかは昔使つてましたから、目をつぶつてても扱えますけど」

「ほう、それは実に頼もしいお言葉ですな。それでは、どうぞお手にとつてよくご覧下さい」

「それじゃちよつと失礼して……。あは、懐かしいな」

圭はうながされてそれを手にした。が、次の瞬間、危うくそれを落としそうになるくらい驚いた。

「これ……！これは、ホンモノじゃないですか！」

「そうですか……？」

「どこでこんなものを手に入れたんですか？」

「そういうことは私よりも、あなたの方が詳しいのではないですか？」

「そりゃ、普通の人よりは多少知っています。でも、詳しいとい

うほどのことはないですよ！」

「そんなものですかね」

「そんなものですかねって。だって、これ犯罪ですよ！」

圭の手にあるのは八九式小銃。現在の自衛隊で使われているライフルだ。

「犯罪……？面白い事をいうお人だ」

男の顔から笑みが消えた。男の両脇に立っている大杉と岩本が身構える。

「とにかく、ここまで来た以上仕事は引き受けてもらいますよ」

「仕事？」

「そうです」

「グイ、グイルト・カツエにですか？」

事態が飲み込めずに、圭の頭はまたもや混乱に陥った。

「『グイルト・カツエ』？それもコードネームですか？」

「いや、あの……」

櫻井は圭の態度に苛立って、バシンと机を叩いた。

「ここまできて、しらばつくれることができると思ってるのか！」

先ほどまでの態度と打って変わって、櫻井は威圧的な声を出した。

「これがターゲットだ」

櫻井は、胸ポケットから一枚の写真を出した。

「ターゲット？」

圭にはまったく話がみえない。が、無視して櫻井は話を続けた。

「来週日本にやってくる。滞在予定は一週間。いいか、日本にいる間に必ずしとめる」

「そ、そんな！そんなこと、俺にはできません」

それを聞くと、櫻井はへびのような目で圭をにらんだ。

「なんだと！」

その目にはあきらかに殺意がこめられている。

いつの間にか大杉と岩本も、圭に向かって拳銃を構えていた。

何が何だかわからないけど、とにかく、この場から逃げなくち

や！

周りを見回した。部屋にはドアが一つ。しかし、もしかしたら力ギかかっているかもしれない。

どうする……？

圭は焦った。

「今のお前には二つの選択肢しかない。仕事を受けるか、冷たい冬の海でダイビングを楽しむか……、だ」

海……？

圭は三方にある窓を、はしから丹念に眺めた。

あつたぞ！

右の窓から、灯台の明かりが見える。しかし、かなり距離はありそうだ。

今速度が十八、いや十七ノット位か……。出航してから三十分として、マリーナまではおよそ十キロ。もっとも直線で進んでいるわけではないだろうから、うまくすると、もっと岸までは近いかもしれない……。

ここにきてようやく肝が座ったのか、圭は意外と冷静に、岸までの距離をはじき出した。

「さあ、どうする？」

櫻井がせまる。

「そんなに真冬の海で泳ぎたいのか？」

そうなんだよな。問題はそこなんだよ。距離もあるけど、真冬の海つてのがな……。

大杉と岩本の顔も真剣だ。下手に動けば撃ってくるのは確実だと思われる。しかし、だからと言って、コロシを引き受ける訳にはいかない。

もっと辛いスタントだって、今までこなしてきたんだ……。

圭は意を決した。

なんとかなるさ！

本物のライフルなんて物騒なものは、手に持っていないでさっさ

と投げ出してしまいたかった。が、奴らの手に渡ると危険だ。

圭は仕方なく、ライフルを持ったまま立ち上がると、いきなり窓の方へ向かって走り出した。

「おい！こらなにすんのんじゃ！」

大杉はすぐさま圭に向かって銃を放った。その銃弾は、圭のほほをかすって窓に小さな穴をあけた。

あそこだ！

圭がその小さな穴に向かってライフルの銃床を打ち付けると、一瞬にして大きな窓ガラスは音をたてて粉々になった。

壊れた窓から海を見下ろすと、圭はさすがに一瞬躊躇したが、戸惑っている場合ではない。ライフルを海に投げ捨てると、自分もすばやく飛び込んだ。

「ばかな！」

船の上で叫ぶ大杉の声が聞こえる。

圭は必死に灯台の明かりに向かって泳いだ。銃声が轟き、時にそれは圭の体をかするように海に沈んでいった。

「もういい。やめろ」

櫻井の冷静な声がする。

「放っておいても時間の問題だ。酒でも飲みながら、珍しいショーをゆっくり楽しもうじゃないか」

水は、思っていたよりももっと冷たかった。皮膚が痛い。体の表面から徐々に凍っていくようだ。それに、いくら手足を動かしてもクーラーはいつこうに小さくなってはくれないし、灯台の明かりも近づいてはくれない。

やっぱり駄目なのかな……。

何度も沈みかけながら圭は思った。海水が目にしみて痛い。

こんなことなら、思い切って君に告白しておけば良かった……。今更悔やんでも、もう遅いか……。

圭の意識は徐々に遠ざかっていった。もう灯台の灯も見えない……。

…。

その時、一艘の船が圭に近づいてきた。船の形はよくわからないが、そんなに大きな船ではなさそうだ。暗い海の中、船の上で人影がうごめくと、影は一気に圭の体を船の上に引き上げた。

「悪運の強い奴だ」

クルーザーの上からその様子を眺めていた櫻井が静かに言った。

船の姿はじわじわと小さくなっていく。

「追わなくていいんですか？」

焦っている岩本を無視して、櫻井は大杉の方を見た。

「手は打ってあります」

「そうか、それは上々」

そう言つと、男は右手に持っていたグラスからブランデーを口に
した。

第四章 F

—

「どこかで見た事ある気がするんですよ」

北村のこのぼやきを、もう何度聞かされたことだろう。

「昨日からそればかりだな。聞いている俺の方が面倒だから、思い出すなら、とっとと思い出せ」

たばこの火をいかにも面倒くさそうに灰皿に押し付けながら、竹之下はうんざりした声を出した。

「それができたら、苦労しませんよ……。なんかこらほう、女優さんとかでも、顔だけ出てきて名前が思い浮かばないってことよくあるじゃないですか。その気持ち悪い感じがたまらないですよ」

「おまえ、そりゃ年食ったって事だ。大丈夫、そのうち名前どころか顔も浮かばなくなつて、もっと進みやありがたいことにかみさんの顔もわからなくなるって」

あと数年で定年を向かえる竹之下の一言に、最近脳のおとろえをはつきり感じている三十八歳の北村は反論できなかった。

人を見た目で判断してはいけないというが、確かに、この二人が刑事だとは誰も思わないだろう。しかし、出世できそうにないという印象は大方当たりである。

千代田区霞ヶ関中央合同庁舎二号館。警視庁組織犯罪対策組織犯罪対策第二課。

そんなだいそれたところが、この二人の職場なのである。

「前を走っていた赤い車を運転していた女と、成田空港で黒塗りの車に乗り込んだ男……。俺、前にどこかで同時に二人を見た気がするんだけどなあ」

「思い過ごしじゃないか。ま、思い出してもロクなことはないから、余計なことは思い出さない方がいいぞ」

「竹之下さん！」

「まあ、大体あんなタレコミ本気にする方がおかしいんだよ。国内に潜伏する黒色テロリスト組織が、成田空港で超一流のスナイパーと接触を図るなんて。まったく、仕事増やしやがって……。おとなしくしてりゃ、俺はもうすぐ定年なんだ。まあでも、あの時パンクしてくれて良かったよ。黒塗りの車が走ってったの東京とは逆方面だぞ。まともに追跡したら、どこまで連れていかれたかわからないもんな」

「なに言ってるんですか。定年だからこそ、もうひとはな咲かそうとは思わないんですか？」

「ちつとも思わないね」

「……」

「北村ももういい年なんだからさあ、そんな青臭いこと言うなよ」

「竹之下さんと一緒にしないで下さい。僕は定年までまだ二十年以上あるんですから。その間に、やっぱり警視総監賞の一つや二つ欲しいじゃないですか」

「そんなもんもらったって、どうするんだ？食えるわけじゃないし」

竹之下は興味なさそうに、タバコに火をつけた。

「大体、今日日そんなこという刑事は早死にするぞ。いいか北村、この世は生きててなんぼだ。ましてや俺たちや公務員。公務員は公務員らしくしてないとな。そこんところちゃんとわきまえておかないと、お前いらん苦勞するぞ」

「いらん苦勞なら今させられてます」

ため息が一つ、北村の口からこぼれた。

二

潮の香りがする……。ああ、波の音も聞こえるじゃないか……。ってことは、やっぱり失敗したのか。俺、あいつらに捕まっちゃっ

たんだな……。

圭ははっきりしない意識の中で、漠然と考えていた。

でも、まだ生きてるってことはそれだけでも奇跡的か……。それにしても、なにがどうなってるんだ？

亡き母の優しい声が耳に響く。

知らない人に付いて行っちゃいけません。

「母さん……。本当だな。知らない人には付いていくもんじゃないね」

そうつぶやくと、圭は再びまどろんでいった。

しばらくして、ようやくはつきりと意識を取り戻した圭の目に飛び込んできたのは、見知らぬ老人の柔和な顔だった。

冬だというのに日焼けした顔に、背が低くてずんぐりとした体型。耳が遠いのか補聴器をつけている。

「おお、気が付かれたか？良かった！良かった！」

老人は安心したように言った。

「気分はどうです？あなた、丸一日眠っていたんですよ。なかなか目を覚まさないから、本当に心配していたんです」

老人はおだやかな口調でやさしく圭に問い掛けた。

「あの……、俺……？」

言いながら、圭はハツとした顔になり、身を固くした。

奴らの仲間かもしれない……。

圭の心情を察したのか、その様子を見て老人はクスツと笑って、

「大丈夫。心配しなくていいですよ」

と、まるで子供をあやしているような口ぶりで言った。

「一体何をやったのか、私なんぞには検討もつきませんが、この寒さの中で海に浮かんでおったということは、どちらにしろ相当の事情がありなのでしょう」

老人の口調はあくまでも穏やかで優しくかったが、それでも圭はなかなか警戒心を解く気にはなれない。

「私も、まさか夜釣りに出て人を釣ることになるとは思ってもいま

せんでしたよ」

「夜釣り？この寒いのにですか？」

圭は不信そうに聞いた。

「ええ、この時期はメジナが豊富なんですよ」

「そうなんですか……」

「うまくすれば、クロダイもおがめます。いや、しかし冬の夜釣りは体には堪えますなあ。もっとも、寒中水泳に比べれば大したことじゃないでしょうが」

老人はクスツ笑った。

「しかし、びつくりしましたよ。エサを釣り針につけながら、何気なく沖合を見たんですよ。そうしたら、遠くの方でなにか動いているじゃありませんか。魚にしては随分大きいなと思って、望遠鏡を覗いたんです……。そうしたら、この寒いのに人が海を泳いでいるじゃありませんか！びつくりして、急いで救助に向かったんですよ。いや、世の中何が起るかわかりませんな、まったく」

楽しそうに笑う老人のその柔和な顔を見ると、少しずつ圭の警戒心もほぐれていくようだった。

「ところで、あの、ここは？」

「ここ？ああ、ここは私の家ですよ。定年になったら海の傍に住んで、釣り三昧の生活を送るのが長年の私の夢でした。五年前にようやくその夢を叶えて、この家に移り住んできたんです。まあ、さして広い家じゃないですが、年寄りが一人で暮らしていくには十分ですよ」

そういわれて、圭は部屋を見回してみた。六畳の和室に、古びたたんすが一竿置いてある。床の間には掛け軸と、『王将』の大きな将棋の駒の置物が飾られている。が、掛け軸は素人目に見ても大したものではないことがすぐに見てとれる。それに柱や壁の感じからすると、決して新しくも上等でもない家のようにだ。

「お一人なんですか？」

「ええ、気楽なもんですよ」

「そうですか」

「まあ、たまにおせっかいな娘が様子を見に来ますけれどね……」
そう話す老人の顔は、少しさびしそうに見えた。

もしかして、父さんが生きていたら、このくらいの年なのかな？
老人のその姿に、圭は久しぶりに自分の寂しさを思い出した。

「ところで、自己紹介がまだでしたね。私は、西田明と申します。
あなたは？」

「あ、俺、俺ですか」

「そう、お名前は？」

「十文字圭です」

答えて、圭はしまったと思った。

「十文字圭……？」

その様子を見て老人の目が鋭く光った。

「本名ですか？」

だが、口調はあくまでも穏やかなままだ。

「え……？」

「いや、実に響きのよい、はいからな名前だと思って」

「あの……、本名は……、村岡圭太郎です」

「村岡圭太郎君？」

「はい」

「なぜ、うそを？」

「あ、いやうそじゃないんです。芸名なんです」

「芸名？」

「ええ、俺、売れない役者をやって……。仕事上、自己紹介する
ときはいつも芸名なんで、それがクセになっちゃってて」
「なるほど」

西田はさも納得したといった風情だ。その様子に圭もほっとした。

「しかし役者さんとは、すごいですね」

「いや、全然すごくないんです」

「いえいえ。大したもんですよ。私は芸能人という人に、生まれて

初めてお目にかかりました」

「いや、芸能人という程のものじゃないんですが……」

圭は照れくさいというよりも、困ったという顔をした。

「確かに言われて見れば、大変ハンサムなお顔立ちをしていらつしやる」

西田は改めて圭の顔を眺めた。

「それにしても、なんで真冬の海を泳ぐなんてことになったんですか？あ、もしかして何かの撮影だったんですか？それで、事故でも？」

「それは……、自分でもよくはわからないんですが……」

そういい置いて、圭はいままでのことを素直に西田に話した。

「そうですか……。それはとんだ災難でしたね」

圭の話を聞き終えた西田は、心から圭に同情しているようだった。「まあ、ほとぼりが冷めるまで、しばらくはこのあばら家においてなさい。もっとも、こんな年寄りの相手がお嫌じゃなければの話ですが」

「お嫌だなんて、そんな……、でも……」

圭の頭に濡れて駄目になったであろうスーツや、タカシの顔が浮かんだ。

「大体、今下手に外に出たりしたら、またどんな事があるかわかったもんじゃありませんよ。今外に出るのは、絶対に危険です。しばらくはここに留まって、様子を見たほうが賢明でしょう」

西田は心から心配しているようだ。

確かに、何が起きてもおかしくはないな……。

想像して、圭は固まった。

「無茶をしたんだ。体だつて休めないよ。圭太郎君は覚えていないでしょうが、夕べは高熱を出して大変だったんですよ。今日の午後になって、ようやく下がってきたんです。後のことはまた改めて考えればいいじゃないですか。私も出来る限りの事はしますから。それに……」

そう言つと、西田は懐かしそうな顔をして圭を見た。

「圭太郎君を見ていると、なんだか死んだ息子が帰ってきたみたいでほんとけないんですよ……」

「息子さん……？」

「ええ、生きていればちょうど圭太郎君ぐらいのはずです。七年前に事故でなくしましてね」

「……、そうだったんですか……」

うら若い我が子を亡くした父親と、両親を幼くして亡くした子。奇しくも二人は、同類の感慨と寂しさを抱っていたらしい。

だから、俺も父さんのことなんて思い出したのかな。

西田の気持ちが痛い程分かるだけに、圭は辛かった。

「それじゃ、お言葉に甘えてしばらくごやつかいになります」

後のことはなんとかなるだろう。今は、この人のよさそうなさびしい老人の側にいたいと、圭は思った。

「そうですか！それはよかった」

圭の言葉を聞いた西田の声は、本当に嬉しそうだった。

「ああ、そうだ、そうだ。息子で思い出しました」

そう言つて、西田はたんすの引き出しを開けた。その中には、若者むけの男性の服が入っていた。

「少し古いものなので、お気に召さないかもしれませんが……」

言いながら、西田は懐かしそうにたんすの中を見やった。

「私と違つて背が高い子だったから、圭太郎君には多分ちょうどいいと思いますよ」

確かに、サイズは合つていそうだ。

「出来る限り処分はしたんですけど、やはり全部という訳にはいかなくて……。こんなもので良ければ着てください。ほんとにいつまでいてもいいんですから！ああ、そうだとお腹がすいたでしょう。大したもんはありませんが、何か作ってきましょう」

そついうと、うれしそうに西田は部屋を出て行った。

部屋を出た西田は、台所に向かった。が、台所を通過してその隣にある居間らしき部屋に入ると電話の前に座り、なにやらぶつぶつと独り言を言い出した。

「私だ。そちらの首尾はどうだ？」

三

「ああ、F」

独り言ではなかったようだ。Fの補聴器はイヤホンになっているらしい。

「はい、手配はすべてしておきました。じきに裏が取れると思います。でも、私が見ていた限りでは、その必要もなさそうに思います。……。ずっと彼の表情を読んでいましたが、嘘についているようにはとても見えませんでした」

ヘッドセットをつけたIはそう言って、並べて配置されている無数のモニターの方を見た。どれもが、西田の家の模様を映し出していた。当然、圭の姿も！

今、圭が寝ている部屋につけられている監視カメラは、大きな将棋の駒の中に仕込まれている。

「しかし、油断は禁物だ。あの無数の体の傷跡は、平凡な人間に作れる代物じゃない。やはり、何か訳があるのだろう。それに、本当に表の顔が役者だとしたら、それこそ騙されかねないからな」

「そうですね……」

「とにかく裏づけを急いでくれ」

「わかりました。なにか情報が入り次第、ご連絡します。Fもお気をつけて」

「分かっている。じゃ、頼んだぞ」

二人の会話が切れたと同時に、微かな音をたてて入り口のドアがゆっくりと開いた。Iはとっさに身構えながら、耳を澄ました。

「俺だ」

聞こえてきたのはKの声だ。

「なんだ、脅かさないでよ」

「お前を脅かしてもしようがない」

Kは無愛想な口ぶりでもいいながら部屋に入ってきた。もちろん、いつもの格好で。

「どうだ？」

暖房の効いている部屋である。Kはコートと帽子を脱ぎ、サングラスを外した。すると、その顔をIがまじまじと見ている。

「なんだよ？」

「本当によく似てるわねえ。そら恐ろしいくらい」

「生き別れの双子の兄弟はいないの、なんて聞くなよ」

「言わないわよそんなこと」

先を越されてIは少し面白くなさそうだ。

「Kと同じ人間がもう一人いるなんて、考えただけでゾッとするわ」

Iは大げさに嫌そうな仕草を試みせた。

「どういう意味だ？」

KはIをジロリとらんだ。

「ほら、そのこっわい目。見た目の作りはまったく同じなのに、どうしてこうも違うのかしらね。やっぱり性格の問題かしら」

Kの視線を避けるように、Iはモニターを見つめた。そこには、安心しきった顔をして眠りこけている圭の姿があった。

「あら、また寝ちゃったわ。熱はもう下がったはずなんだけど」

「のんきな奴だな。こんなのと一緒にされたら俺もたまらん。俺はこんなに呆けた顔はしていない」

モニターを覗きこみながら、Kは不機嫌な声を出した。

「はいはい」

Iの声はうんざりしている。

「それより」

Iはモニターから目を離すと、Kを振り返った。

「こつちが彼の救出やら身元の確認やらでテンヤワンヤしてつたいののに、あなたは何をしてたの？」

「奴らが彼のスーツに仕込んでいた発信機を持って、少し目立つように街中を動いていた」

「それで？」

「追尾が始まったんで、頃合を見計らってまいてきた」

「まいた？さすがのKが随分と弱気なことだね」

Iの声は皮肉たつぷりだ。

「仕方がないだろう」

Kの声はさらに不機嫌さを増している。

「まさか街中で拉致されることはないだろうが、いきなりドスンときた日にゃ、いくら俺でも防ぎようがないからな。とりあえずは、俺が無事でいるということを、相手に認識させりゃいい」

「なるほど」

「そういうことだ」

「それで、発信機は？」

「ここにある」

Kは自分のポケットを指した。

「いやだ。持ってきたの？それじゃここも危なくなるじゃない！」
とがめるようにIが言う。

「大丈夫だ。俺がそんなミスをすると思うか？」

「……？」

「ちゃんと、電波を遮断するケースに入れてある」

「なんだ、そうなの」

Iはホツと胸をなでおろした。

「ああ、もしかしたらまたコイツを使う時がくるかもしれないからな」

「そう、そうよね」

あまりにも当たり前前の事に気づかなかった自分が恥ずかしくて、Iはつい照れ笑いをした。

「なに気味の悪い顔してんだよ」

Iの照れ笑いに対するKの口調は、あくまでも不機嫌かつぶつきらぼうだ。

「悪かったわね!」

その言い方に、Iの口調もついけんか腰になってしまふ。

「あ……、そういえば」

しかし、KはIの様子を気に留める風もない。

「お前、『WILD KATZ』って知ってるか？」

「そのくらい知ってるわよ。ドイツ語で『山猫』」

Iはなにやらとぼけている。

「いや、そうじゃなくて」

Kの頭に、必死に追いかけて来る園児の集団が浮かんた。

思い出さなきゃ良かった。

あまりいい記憶ではない。

「あ、いいんだ気にしないでくれ。なんでもない」

「あら、どうして？」

Iはわざとらしい笑顔を見せた。

「今さっき調べがついたところよ。でも、どうしてあなたがヴィルト・カツツエのことを知っているの？随分と情報が早いじゃないの」

「いや、知っているというほどのことではない。ただ、街中で偶然耳に入ってきたから……」

「そうなの……。じゃまだ詳細は知らないのね」

じらすように言いながらも、Iはうれしそうにパソコンの画面を

開いた。

「……？」

「ほら、見て」

うながされてKが画面をのぞくと、そこにはカッチャレンジャーのホームページが。

「これが……、なにか？」

「いい、ここからよ」

そう言ってIがマウスをクリックすると、画面いっぱいにヴィルト・カツエの写真が映し出された。

「……」

「言葉も出ないっていうことは、説明の必要はなさそうね」

呆然としているKの顔を見て、Iは勝ち誇ったように言った。

四

パソコンの画面右半分に映し出されたヴィルト・カツエ。

「これが……、Kか？」

それを見ながら、疑わしげに男が聞いた。 櫻井だ。

「はい、ボス。見て下さい」

そういつて岩本はパソコンを操作すると、一枚の写真を画面左半分に出した。

「奴が気を失っている間に撮ったものです。それをこうすると……」

岩本は画面上でヴィルト・カツエと圭の写真を重ねた。

「ほう、輪郭から目の位置、鼻や口の位置までぴったりと一致するな」

「はい。どう見ても同一人物としか思えません」

答えたのは大杉だった。

「そうか」

櫻井は満足気にうなずいた。

「しかし、よく気が付いたな」

「はい。ヴィルト・カツエという名前に聞き覚えがあったものですから。実は、うちのガキがカツチャレンジャーの大ファンなもので」

「カツチャレンジャー？ 一体なんだ？ それは？」

「ヴィルト・カツエが登場する子供向けのヒーロー・アクション番組です」

「ヒーロー・アクション番組？」

「はい」

「ということは、銃や爆弾なんかも出てくるのか？」

「はい。もちろんです。なにしろ子供向きですから、それはそれは分かりやすい形で出てきます」

「そうか……」

櫻井はまたもや満足気にうなずいた。

「ところで、奴の居場所は分かったのか？」

「すみません。今、必死で追ってはいるんですが、何しろ発信機が電波の届かないところにあるようで……」

「そうか。まあ、自分たちのミスは自分たちで挽回するんだな」

「は、はい」

「楽しみにしているよ、大杉君、岩本君」

櫻井の瞳が冷酷に光った。

五

経理にまわすための領収書を必死に探している北村の元に、刑事というよりもその道の方といった風貌の係長が近寄ってきた。

「北村、竹之下は？」

風貌通り、ドスの聞いた声だ。

「さあ……、私に聞かれても……」

言いかけた北村の頭を係長はいきなりひっぱたくと、北村の頭上に無数の星が飛んだ。

「お前の相方だろうが！ちゃんと見張ってる！」

「見張ってるって言われても……」

「言い訳してるんじゃない！」

再び北村の頭上に大量の星が飛んだ。

「まあ、いい。お前らにうってつけの仕事ができたぞ」

そう言つと係長は北村に一枚の紙切れを渡した。

紙切れに簡単に目を通すと、

「これは、俺たちじゃなくて、五課の仕事だと思つんですけど……」
と、北村は恐る恐る言つてみた。

「バカヤロー！どこも手が足りないんだよ。このビルで暇そうにしてるのは、お前と竹之下くらいのもんだ。仕事が来ただけでも、ありがたいと思え！」

北村の頭上には、季節外れの天の川が輝いている。

「いいか、この間みたいになら、タイヤが突然パンクしましたなんて間抜けな報告するくらいなら、もう二度と帰つてこなくていいぞ。今度そんなドジ踏んで見ろ、無人島に派出所作つて島流しにしてやるからな！」

言い捨てて、係長は自分のデスクへと戻つていった。

「いててて。ほんとに手加減つてものを知らないんだから、やんなつちやうよな。つたく、竹之下さんのせいでもこれだよ……」

頭上の星が収まるのを待つて、北村は渡された紙きれに再び目を走らせた。

「はあ……」

読むなりうんざりし、それでも仕方なく竹之下を探しに部屋を出ていった。

第五章 愛

—

「ご飯できましたよ。圭太郎君」

西田が部屋に入ってきてうとうととしていた圭に声を掛けた。

「ああ、すみません」

そう言いながら起き上がろうとして、布団の上で圭は少しよろけた。

「ああ、大丈夫ですか？」

慌てて西田が圭の体を支える。

「やっぱり相当体が痛んでるんですね。ほら私に掴まって」

「いや、大丈夫ですよ。急に起き上がったから、体がちよつとびっくりしたんだと思います。ほんとに大丈夫ですから」

そう言つて圭は少しはずかしそうに笑い、ゆっくりと立ち上がった。

「ほら、もう平気です」

「本当ですか。無理しないで下さいね。私は体は小さいが、こう見えて力は強いんです。なにしろ釣りというのは時に格闘ですからね。ヘミングウェイの『老人と海』とまではいきませんけれどね」

背の低い西田は、まだ不安そうに背の高い圭を見上げるように言いいながら、居間に案内した。

「うわ！おいしそう！」

食卓の上には、決して豪華とはいえないが、いかにも心を込めて丁寧に作られた感じのする料理が並んでいる。

「どうぞ、どうぞ、そこに座つて」

うながされて圭は、壁を後ろにして食卓の前に座つた。

「たくさん食べて下さいね。今はとにかく体を直さなきゃ。そのためには、遠慮なんかしないでどんどん食べることです」

そう言つて西田も食卓の前に座ると、茶碗にご飯と味噌汁をよそつて圭に渡した。

「はい！いただきます。いや、ほんとおいしそうだなあ」

「さ、どうぞどうぞ、遠慮しないで」

しかし、気づけば丸一日以上食事をしていない今の圭には、遠慮などという文字はみじんも無かった。

勢いよく料理をたிரらせていく圭を、西田が満足気に見つめている。と、突然家のドアの開く音がして、三十歳過ぎくらいの大きなイヤリングをした女性が入ってきた。エだ。こちらは、イヤリングがイヤホンの変わりになっているらしい。

「あら、お父さん。この人が、電話で話してた人？」

「エはごく自然西田に話しかけた。」

「そうだよ。国島圭太郎くん。あ、圭太郎君、これ私の娘。いい年して一人もん」

西田もエと同様。二人の会話には、不自然さのかけらもない。

「一言多いのよ」

「エは西田を軽くにらんだあと、

「藍です。よろしく」

と、台所に立ったまま、圭に軽く会釈をした。圭は思わずほぐしていた足を正座に直すと、

「国島圭太郎です。このたびはお父上に大変お世話になりました」と、深く頭を下げた。

「まあまあ、固いことは抜きにして。ところで、お前メシは？」

「うん。ご飯はすましてきた」

「エはお茶をいれるために、湯をわかそうとしている。その時、居間の片隅にある電話が鳴った。狭い部屋だ、西田が腕を伸ばして受話器を取った。

「もしもし、西田です。え、あゝ今夜はちょっと……、いや、そういう訳じゃないけど……、うん……、え！そうなの……」

西田は困った顔をしている。

「お父さん、行ってくれば？今夜は絶好のコンディションなんですよっ？」

台所で聞き耳を立てていたⅠが西田に声を掛けた。

「あ、ちよつと待って」

受話器の口を塞ぎながら、西田はⅠの方を向いた。

「でも、やっぱり心配だし」

「大丈夫よ。私は明日オフだから、もともと泊まっていくなつもりできたのよ。だから、安心して夜釣りに行ってくればいいじゃない。

圭太郎君のことなら、私が責任を持って面倒見るから」

「そうか……」

「そうよ」

「あの、俺ならもう大丈夫ですから。気にしないで行ってください」
二人の会話を聞いていた圭が申し訳なさそうに言った。

「じゃ、そうしようかな」

西田はちらりと圭を見ると、再び電話口に出た。

「待たせて悪かったね。やっぱり行くよ……。うん、すぐ出るから、じゃ」

電話を切ると、西田はいそいそと立ち上がった。

「悪いね圭太郎君。じゃあちよつとこれに、行ってくるね」

西田は釣りをするまねをした。

「いや、謝るのはこちらの方ですよ。すみません、俺のせいでいろいろ気を使わせてしまつて。せつかなんですから、俺のことは気にしないで、じゃんじゃん釣つてきてくださいね」

圭はそう言いながら、見送りのために立ち上がろうとした。

「ああ、圭太郎君いいから、いいから、食事を続けて」

そう言つと、西田は壁際にかけてあつた防寒具を大量に着込みながら、玄関へと向かつた。

「お父さん、でもあんまり無理はしちゃだめよ。ちゃんと寒くないように着込んだの？ほら、帽子を忘れてるわよ」

言いながら、Ⅰは台所に置いてあつた帽子を持って玄関へと行き、

それを西田に手渡した。

「はい、これ」

「ああ、ありがとう藍」

帽子を受け取ると、西田は長靴を履くために、玄関のたたきに座った。と、その背後から、圭に聞こえぬようにIはそつと声を掛けた。

「お疲れになったでしょう。あとは私に任せて、ゆっくりお休み下さい」

西田は振り返って、無言で頷くと、

「じゃあ、圭太郎君行ってくるよ」

と、居間に向かって言い、愛用の釣り竿を握り締め玄関を出て行った。

「こんなに寒いつていうのに、まったく物好きよねえ」

居間に入ってきたIは、圭にお茶を出しながら呆れたように言った。

「本当にお好きなんですね」

猫舌なのか、圭は出されたお茶を両手に持ってフウフウしている。

「大体の事はお父さんに電話で聞いたけれど、それにしても、すごい事に巻き込まれたものねえ」

お茶を一口飲んで、ちよつと熱かったかなと思いながら、Iは言った。

「はい、ほんとに。自分でも、未だに何が何だかわからないんです」

「そりゃそうよね。聞いた私たちだって、にわかには信じがたいもの」

「そうですよね」

少し冷めたのか、圭はようやくお茶を口にした。

「ところで、体は？もう大丈夫？」

「はい。ゆつくり寝かせてもらって、おいしいご飯を頂いて。これで治らなきゃ、バチが当たります」

「でも、無理は禁物よ。こんな寒い時期に海に飛び込むなんて……」。

普通なら心臓発作を起こして、とつくにあの世いきよ。いくら若いからって、この程度で済んで本当によかったわ」

「まあ、日ごろの鍛錬が違いますから」

「鍛錬？あ、そうそう、圭太郎君はアクションスターなのよね！」

「いや、スターでは……、ないですけど」

「今、どんな役をやっているの？」

「今……、ですか？」

「そう」

「戦隊ものです。あの、カッチャレンジャーっていう」

「あ、知ってる！」

「え！知ってる……んですか？」

「実は私、小児科の看護婦なの。だから子供の流行モノには敏感なのよ。でも……」

Iは圭の顔をまじまじと見つめた。Kとオーバーラップして笑いそうになったが、必死に堪えた。

「どの役？カッチャレンジャーじゃないわよね？」

「あ、あの……」

「あ！わかった！」

「わかつちやいましたか？」

「わかつちやった」

それを聞いて圭はうつむいた。

「すごいじゃない！子供たちにはね、カッチャレンジャーよりヴィルト・カッツェの方が人気があるのよ」

「本当ですか？」

単純な圭はうれしそうに顔をあげた。

「本当よ。なんだかほら、カッチャレンジャーって若くて顔はいいけど、なんとなくアクションがイマイチじゃない？それに比べてヴィルト・カッツェのアクションは大したものよ。ま、確かにお母様方はイケメンヒーロー君たちに夢中だけど、子供はそれだけじゃ騙されないから」

それを聞いた圭の顔は満面の笑みに彩られている。

同じ顔でも、ここまで違うとは……。

Iの脳裏、にKのムスっとした顔が浮かんだ。

「そうかぁ。子供たちにはわかるのかぁ」

圭はひたすら夢見心地だ。

「でも、ま、あの女の子は悪くないわね。なんて言っただけ？」

「カツチャ桃ですか？」

「そう」

「桐生エリナ」

そう言った圭の頬が少し赤らむのを、Iは見逃さなかった。

「桐生エリナちゃんね。本名？」

「いや、苗字は違います。それに、芸名はカタカナですが、本名は漢字です。『愛理奈』って書くんです。親しい人たちは『愛ちゃん』って呼んでるみたいです」

「そうなの？それじゃ私と同じじゃない。で、圭太郎君は『愛ちゃん』って呼んでるの？」

そう言っただけでIは圭の反応をそれとなくうかがった。間違いない。頬はさらに赤みを帯びて、耳まで真っ赤になっている。そのほかにかなだような表情。

「いや……、俺なんて、そんな。あつちは、主役の一人だし……。それに、十歳も違うし……。俺なんて……」

圭はいつの間にか、語るに落ちている。そんな圭の姿がIにはおかしくてたまらなかった。

この年になってここまで純情とは。となると、かなりの晩熟だわね。

Iは思わず「そりゃ、伯母さんも見合い話探してくるわ」とつぶやいた。

「は？見合い。藍さんお見合いするんですか？」

「え？あ、いや私じゃなくて……、友達、友達がね」

「そうなんですか」

「うん、さっき聞いたばかりだから、何だか頭の中に残ってたのかな。急に思い出しちゃって」

Iは苦し紛れだ。

「見合いかぁ。藍さんはしたことないんですか？」

その質問にIはとまどった。瞬間、Kの顔が浮かんでしまったからだ。

なんで、アイツが出てくるのよ！

「すみません。失礼なこと聞いて……」

目の前で、苦悶の表情を見せているIに圭は少し恐れをなしていた。

「え……、あ、いいのよ気にしないで。それより、遅くなってきたから、もう休んだ方がいいわ。体力回復のためには食べて、寝る。これが一番」

「そうですね。お腹がいっぱいになったせいか、なんだかまた眠くなってきちゃったし。じゃ、僕先に休ませて頂きます」

そう言って立ち上がった圭をみて、Iは思わず噴出した。

「なに？それ」

Iは、笑いながら圭の足元を指差した。

「あ、やっぱりおかしいですよ。男の冷え性なんて」

思わず照れ笑いをした圭の足には、分厚い靴下が二枚はかれていた。

二

エレベーターを待ちながら、北村は携帯電話を見つめてため息をついていた。

「どうせ、電源切ってるんだろうな……」

思いながらも、ダメモトで竹之下に電話を掛けたが、結果はため息を深くすることだった。

「まあ大体目星はついてるからいいけど。それにしてもこの寒いのに俺もご苦労なこったぜ。竹之下さんの定年まであと二年か……。俺が待ち遠しいよ、まったく」

そうつぶやきながら、やってきたエレベーターに乗り込んだ。

一階についた北村は、正面ではなく裏口から外へ出た。こちらの方が、竹之下の行きつけの喫茶店が近いためである。

店に入ると、案の定竹之下はそこにいた。一番奥の席に陣取り、のんきにタバコをふかしながら、スポーツ新聞を読んでいる。

「竹之下さん！　たく何してるんですか！」

その声に、当の竹之下よりも、竹之下の隣の席に座っていた男が機敏に反応した。

「よう！　北村！」

「あれ、室井！　久しぶりだなあ」

「元気だったか？」

「いや……。心も体もボロボロだよ」

「何かあったのか？」

北村の様子に、室井は心配そうな顔をした。

「……まあね」

言いながら北村は、視線を竹之下に向けた。が、竹之下がそんなことを気にするはずがない。

「カミさんと喧嘩でもしたか？」

それを聞いて、竹之下は大笑いしている。

「いや、あんた面白いこと言うねえ」

「いえ、別に面白くはないと思いますが……」

室井は困惑気味だ。

「あ、そうね。よく考えたら、大して面白くなかったな」

竹之下は笑うのをやめて、今度はつまらなそうな顔をして北村の方を向いた。

「ところで、この人誰？」

「俺の同期ですよ。こっちは、『同じ課』の竹之下さん」

北村は竹之下のことを『上司』とだけは言いたくなかった。

「室井といいます」

室井は立ち上がった、丁寧にお辞儀をした。

「あ、室井さん。そりゃ、どうもどうも。ご丁寧に。お噂はかねがね……」

竹之下は座ったままでいる。

「聞いてませんって言うんでしょ。もう聞き飽きました」

竹之下は、先を越されてもなんら気にする風もない。

「まあまあ、固い挨拶もなんだから、座って座って」

うながされて、仕方なく二人は席についた。

「ところで、室井の方はどう？ 今、すごく忙しいんだろう？」

「ああ、思った以上に忙しくなってきた」

「そりゃいけないなあ。刑事が忙しがつてるような国は、ロクな国じゃない。日本は治安がいつていうから、俺は警察に入ろうと思っただけだねえ。ほら、治安がいいなら警察は暇じゃない」

竹之下が口を挟んだ。適当な発言だが、一理あるといえなくもない。

「いや、でも今回は事件で忙しいわけじゃないですから」

室井は竹之下とは正反対のタイプらしい。すなわち、クソ真面目。

「事件じゃない？ あれ？ 警察って、事件の捜査以外になにかすることあったっけ？」

「身辺警護ですよ」

うんざりして北村が言った。

「誰の？」

「新聞読んでないんですか？」

「読んでるよ」

竹之下は、手に持っていたスポーツ新聞を軽く持ち上げた。

「いくらスポーツ新聞でも、さすがに載ってるはずです」

それを竹之下の手からもぎ取ると、北村は雑にページをめくり始めた。

「ほら！ここ！」

と、北村は机の上に新聞を置くと、一つの記事を指差した。

そこには、「フィンランドの天才科学者明日来日！」と大きな見出しが躍っている。

「へえ、偉い人がくるもんだねえ。で、この人そんなに偉いの？」

「偉いなんてもんじゃないですよ。最新のミサイル防衛システムを開発したんです」

「そんなもん俺にや関係ない」

竹之下はそっぽを向いた。

「これがなんだか分かって言ってるんですか？」

「そりゃもちろん！」

竹之下は北村の方へ向き直った。

「分かってるわけないだろう。だから関係ないんだってば」

「……」

疲れ切って言葉も出なくなった北村の変わりに、室井が説明を始めた。

「例えば、となりの国の首相が気まぐれにミサイルのスイッチを押したとすると、大体十分程度で日本に着弾するんです。そうなってしまうては、もう手の打ちようがありません。着弾して、日本が沈没するのを待つばかりです」

「え？そうなの？」

「そうです。そこで博士は、発射されたミサイルを、着弾する前に打ち落とすというシステムを開発されたのです。そうなれば、いつミサイルを発射されても怖くない。それに、ミサイルを撃つても効果がないとなれば、買ったたり作ったりすることなくなるでしょう。ミサイルの意味がなくなりますからね。となれば、世界中で軍縮が進むということも期待されてるんです」

「そら、大したもん作ったねえ。こりゃ驚いた」

「そう、大したことなんですよ。そうなりや竹之下さんの願い通り、事件が減って警察も少しは暇になるかもしれませんよ。よかったで

すね」

北村の口調は皮肉っぽくなっていた。

「でもさあ……」

「今度は何です？俺は泳げるから、日本が沈んでも心配ないとか言い出すんですか」

「いや、そうじゃなくてさあ。ミサイル作ったり、売ったりしてる会社は倒産するのかなあって。作るもんも売るもんもなくなっちゃう訳じゃない。そしたらみんなリストラだあねえ。いやいや、世の中景気が上向いてきたって言っても、そりやまだまだ一部のことなんだなあ……。あ、そいういや北村、お前何しに来たの」

「あ！仕事ですよ、仕事！」

すっかり竹之下のペースにはまっていた北村は、慌ててポケットから紙切れを出した。

「なに、そのメモ？失くしちゃったことにしとけば」

「そういう訳にはいきません！」

そう言って、北村は竹之下の手にメモを握らせた。そのメモには、日時と場所、その筋の団体名が一つ、それに『麻薬取引』という文字が、殴り書きの見本のようにつづられていた。

「とにかく情報はそれだけなんです。でも、今から飛ばせば、時間にはなんとか間に合うでしょう」

「そんなこと言ってもさあ」

そのメモを見ながら、竹之下はうんざりとした表情を見せた。

「ここ見た？」

竹之下が指差した箇所には、『多分、ガセネタ』と書かれていた。

三

部屋に戻った圭は明かりを消して、布団にもぐり込んだ。すると、すぐにまどろみ始めた。が、

寝る前には必ずトイレに行くのよ。

またもや亡き母の優しい声が脳裏をよぎった。

行っておくか……。

半分寝入っていた圭は、ここが西田の家だという事を忘れていた。寝ぼけて、自分の部屋のドアの方向と向かった。圭の部屋のトイレは共同だ。いったん廊下に出なければならぬ。

暗闇の中よろよと圭が向かっている先には、防寒用の分厚いカーテンに覆われた腰高窓がある。

二・三步進むと、ドアのノブをまわそうとして前方に手を出した。

あれ……？ノブがない……？

寝ぼけ眼を開いてまわりを見渡してみたが、暗くて何も見えない。どこいっちゃったんだろう……？

もう一歩足を進めながら、ドアノブを探して圭は上下左右に手を動かした。

おかしいな……。

手を動かしながら、さらにもう一歩進んだ次の瞬間、パリンというガラスが割れる音と共に、分厚いカーテンの隙間から一筋の光が部屋に飛び込んできた。

……？

なんだろうと思いつながら、圭がカーテンを開けると、今まで見たことのないような黒いガラス窓に少しひびが入っていて、そこから光が差し込んできた。

これは、何の光？何、この黒いガラス？どういうこと？もしかして、これは日の光？でも、西田さんは、これから夜釣りに行くって……。え、どういうこと？今は夜じゃないの？

圭の眠気はいっぺんに覚め、同時に全身の血が引いていくのがわかった。

その時、

「何があったの？変な音がしたけれど」

と、血相を変えた工が部屋に飛び込んできた。

Iを振り返った圭の顔は、真っ青になっている。

「あの、圭太郎君、落ち着いて。これにはいろいろ事情があるの……」

Iはなだめるように、優しく圭に声を掛けた。しかし、圭はおびえたような目でIを見つめている。

「圭太郎君、お願い信じて。全部あなたのためなの」

一歩、二歩とIは静かに圭に歩み寄ってきた。

「来るな！」

叫びながら圭は後ずさりしようとしたが、すぐ後ろには窓があり、それもままならなかった。恐怖が、じわじわと圭を襲ってくる。ガラス窓を破って、海に飛び込んだ時の記憶がよみがえる。

そうだ！

圭は窓の方に向き直ると分厚いカーテンを閉め、その上から窓ガラスに向かって体当たりをした。バリンという派手な音と共に、黒い窓ガラスが粉々になっていく。

圭はカーテンを勢いよくあけた。太陽の光がさんと輝いている。

良かった。一階だ。

確認すると、圭は割れた窓から外へと飛び出した。

「待って！」

背中でIの悲鳴にも似た声が聞こえたが、圭は無視してがむしやらに走り出した。当然靴を履いていないが、分厚い二枚の靴下がそれなりに役に立っている。

圭を追って、幾人かの男が西田の家の物置から飛び出してきた。

Iも家から出てきて、素早く車に乗り込む。

大体、ここはどこなんだ？

走りながら圭は周りを見渡したが、ここがどこなのか検討も着かない。西田の家以外に家らしい影はなく、人の気配もない。しかし、道路は舗装されてセンターラインまで引いてあるところを見ると、このまま走って行けばどこかしら人のいるところに辿りつけそうな

気配はする。

潮の香りがするから、海が近いのは確かなんだろうけど……。それにしても、どこに逃げりゃいいんだ？

中学・高校と陸上部で中距離の選手だった圭は、足と体力には自信がある。実際、追ってきた男たちとの距離は徐々に開いていった。しかし、Iの乗った車はその勢いを増してどんどん圭に近づいてくる。前方に海が見えはじめてきたが、圭は思い切って道はずれ、右手に広がっていた雑木林の中に逃げ込むと、その中を縦横無尽に走った。

先ほどまでの天気がつそのように、急に雲が出はじめると、いきなり土砂降りになった。圭はぬかるみに足をとられ、何度も足をすべらせた。

昔よくこういうことやったなあ。

泥だらけになりながら、圭は自衛隊の演習を思い出していた。

どれくらい走ったのだろう。圭の行く手にはまだ雑木林が続いている。姿は見えないが、Iと男たちもまだ諦めずに雑木林の中で圭を探しているだろう。

冷たい雨が急激に体力を奪っていく。圭はさすがに疲れを覚え、その足がもつれだしてきた。と、かすかに人の声が聞こえる。

やった！

その声に勇気付けられ、圭が声のする方向へと勢いよく走っていると、いきなり雑木林が終わって、視界が開けた。見渡すと、壊れかけた木造の校舎や、さびてボロボロになったブランコなどが見える。どうやら、ここは廃校になった小学校のようだ。目を凝らすと、遠くのほうに人影が見える。

圭はほっとして、人影の方に走り寄ろうとしたが、しかし……、次の瞬間、圭は絶望的な気分になった。

俺、いつの間にか死んでいたのかな？

人影の中に、ヴィルト・カツツエの後ろ姿が見える。

ここにヴィルト・カツツエがいるって事は、幻を見てるのか……

…。それとも、やっぱり俺がもうとつくに死んじやって、天に昇る途中って事か……。そうだな、現場に思い残したことなんてたくさんあるし……。俺、幽霊になって、戻ってきたんだ……。

考えあぐねている圭の元に、あるうことか当のヴィルト・カツツエが圭に向かって走り出した。

さあ、こちらにいらつしやい。

今は亡き母の優しい声が耳に響く。

異様に諦めの早い圭の耳に、聞きなれた声が響いた。

「先輩！」

大きく手を振りながら、ヴィルト・カツツエは叫びながら圭の側までやってきた。

「その声は！タ、タカシ？」

「心配したんっすよ、先輩！」

全力疾走のせいで、タカシは息が乱れている。

「タカシ、ほんとにタカシか？」

「ほんとに俺っすよ、先輩。今まで、一体どこ行ってたんっすか？」

「いや、話せば長くなるんだけど」

「大変だったんっすよ。もう、みんな心配するやら怒るやらで。撮影はすっぱかす、連絡は取れないって。もうそりゃ、大騒ぎだったんっすから」

「そうか、すまん……。でも、撮影は明日のはずじゃ……？」

「何いってんっすか。スケジュール忘れてたんっすか？」

タカシの返答に嫌な予感がして、圭は恐る恐る聞いた。

「成田で撮影したの、昨日だよな？」

「そんなのもう、三日も前の話っすよ」

「三日？」

「そうですよ。その間、俺がどれだけ心配したかわかってるんっすか……」

本当に心配だったのだろう、タカシは涙ぐんでいる。が、圭の心情は浦島太郎状態だ。何が起きているのか皆目見当がつかない。

徐々に二人の周りにスタッフや共演者が集まってきた。カッチャ桃こと桐生エリナの心配そうな顔もその中にあった。圭は、ひとりひとりに向かって「すみません」と頭を下げている。

力一杯怒鳴りつけてやろうと意気込んで近寄ってきた監督は、圭のその姿に何も言えなくなってしまうた。

泥だらけの顔と服。見れば靴さえはいていない。厚手の靴下もボロボロにやぶけ、泥と混じってじっとりと血がにじんでいる。何か事情があるのは一目瞭然だった。

「雨にはかなわん。きりのいいところまで撮ったし、今日はここまでにしておこう」

監督はスタッフに大声で叫んだ。

「圭、お前も一緒に宿に帰るぞ」

普段厳しい監督が、ぶっきらぼうながらも、精一杯優しく語りかけた。

「おい、誰かサンダルかなにか持ってこい。これじゃ痛くて歩けないだろう」

若いスタッフが、その声で慌ててロケバスの方へ飛んでいき、とって返して圭にスリッパを持ってきてくれた。

「さ、これを履いて」

監督にうながされて圭はスリッパを履き、タカシに軽くささえられながらロケバスに乗り込んだ。

しかし……。圭もまわりの人間も全く気づかなかったのだが……。追ってきたIが、その様子をそつと木陰で見ていた……。

四

「圭太郎に逃げられたって!」

首都高速の渋滞にはまっていたKは、ヘッドセットに飛び込んで

きたIの報告にいらついた声を出した。

「それで？」

「大丈夫、もう居場所はわかってるわ」

「お前にしては、随分と仕事が早いじゃないか」

Kの嫌味に反論もできぬまま、Iは状況の説明を手早く済ませた。

「そういうことだから、Kにも急いで欲しいの」

「わかった。それじゃな」

「あ、K」

「なんだ？」

「あの……、気を付けてね」

「切るぞ」

Kは無愛想にそう言つて電源を切ると、胸ポケットから銀色の小さなケースを取り出した。

「さて、お待ちかねの本番だ」

ケースに入っていた発信機を取り出して、ポケットに直接入れるとKはひとりごちた。

渋滞する首都高速を降り、一般道に入つてゆっくり車を走らせていると、一時間もしないうちに怪しい車がKの車についてくるようになった。

運転しているのは岩本。助手席には大杉の姿も見える。

おいでなすつたな。

ミラー越しにその姿を確認しながら、圭は予定通り郊外へと向かった。

広い幹線道路からわき道に入ると、そこは古くからのお屋敷街だった。立ち並ぶ家々は広くて立派なのだが、道路はそれに似ず案外と狭い。対向車がすれ違うのにスピードを落とさねばならない程に、Kは慣れた様子ですいすいとその広くはない道を走っていたが、大杉たちの車が後を着けてきているのを確認すると、車を右に寄せ急停車した。

「どうします？」

それを見て、岩本は焦って大杉に聞いた。

「いいから、何もなかったように追い越せ。気づかれたらマズイ」
大杉の声は落ち着いている。

「は、はい」

そう言われて、岩本は少しスピードを落としながら、Kの車を抜き去った。すると、すぐにKは車を発進させた。今度はKが大杉たちを追う形だ。

「なんだ？ ぴったりと着いてきやがりますぜ」

「まあ、幹線道路にでも出れば巻けるだろう。発信機もあることだし焦る事はないさ」

しかし、ものの五秒とたたないうちに岩本がいらついた声を出した。

「チクショー、バカにしゃがって！」

二人の前方は、行き止まりになっている。やむなく岩本は車をとめた。Kもそれを見て、二人の車が出ないように道路の真ん中に車をとめると、車から降りてゆっくりと二人の方へと向かって行った。

「ヤロウ！」

岩本は急いでシートベルトを外しにかかる、「やめろ！」という大杉の制止もきかずに、勢いよく車の外に飛び出すと、Kに掴みかかった。

「デメエ、なにしゃがるんでい！」

それを見て大杉も車から飛び降りてきた。

Kは相変わらずの嫌味な口調で、岩本の耳元でささやいた。

「いいのかな、こんなことして？」

「なんだと、コノヤロー」

更に強く掴みかかろうとする岩本を、大杉が後ろから抑えにかかった。

「やめろ。横見ろ、横！」

うながされて岩本が横を見ると、そこには警官が立っていた。

「エッ？」

さらによく見れば大きな門の横にポリスボックスがある。どうやら現役の大臣の私邸らしい。

「なにか問題でもあるのかね」

警官が岩本に向かってとがめるように訊いたが、それに答えたのは岩本ではなくKだった。

「いえ、何でもありません。私が道を間違えてしまつて……。お騒がせして申し訳ございませんでした」

そう言つてKが頭を下げると、大杉と岩本もあわててそれに続いた。

「それならばいいがね。しかし、邪魔だから早くどいてくれ」

納得はしてないぞといった顔で、警官はポリスボックスの中へと入つていった。

「本当にすみませんでした。でも、おかしいなあ……。この道でよかつたはずなんだけど……」

言いながらKは大杉の方を向いた。

「すみません、地図を見直しますんで、運転を変つてもらえませんか？」

「はあ？」

大杉には意味がわからない。

「早くしないと、痛い腹を探られることになるぞ」

Kは大杉の耳元でささやいた。

「それじゃ、僕は助手席に乗りますんで」

納得のいつていな大杉をよそに、Kはさつさと車に乗り込んだ。

「俺の後に着いて来い」

そう岩本に声を掛けると、大杉は仕方なくKの車の運転席に座つた。

「どういふつもりだ」

質問には答えず、Kはジャケットの左側を軽くめくり、装着している防弾チョッキとシオルダーホルスターに収められている銃を見

せた。

それを見た大杉は諦めたように、車をバックで発進させた。

「取り敢えず、ボスの所へ連れて行ってもらおうか」

威圧的にそう言われると、大杉は従わざるをえなかった。

五

バスが宿にたどり着くまでの小一時間、疲れ切っている圭を労わりつつも、誰も圭を休ませてはくれなかった。矢継ぎ早に質問が飛び、圭の返答にどよめき、更に質問が飛ぶ。脚本家に至っては、いいネタにありついたとばかりに必死にメモを取っている始末である。結局聞かれた事にひたすら答えるだけで、圭自信が状況判断をするための質問は何一つする暇さえ与えられなかった。

宿に着くと「念のために」と、監督が医者を呼んでくれた。

「二・三日安静にしていれば、問題はないでしょう」

診察を終えた医師の言葉に、すでに着替えをすましたタカシがホツとした表情を見せた。が、監督は「二・三日ですか？」と少し不満げだった。

「ロケの予定は明後日までなんです。私も鬼じゃないんで、まあ明日一日ぐらいは休ませてやってもいいですけど……。明後日には、多少動かしても大丈夫ですよね？」

「医者としては勧めませんな」

「そうおっしゃらずに。なんかこう、ぶつとい注射でも打って」

「無理です。今は注射なんぞより安静が一番です」

「そこをなんとか……」

「では、お好きにどうぞ。私は医者として言うべきことは言いましたから。後はどうなさろうと、私の知ったこっちゃありません。本人次第ですよ」

医者はムツとしたように言うと、看護婦を従えて部屋を出て行っ

た。

「本人次第……、だそうだよ。まあ、頑張って明日一日で治せ。じや、お休み」

そう言い残して、監督も部屋から出て行ったが、当の本人はその言葉を聞いてポカンとしている。

「あ、そうだ先輩の荷物持って来ましたからね」

「荷物？」

「そうっすよ。先輩、成田に荷物置いたままいなくなっちまったじやないっすか」

タカシは、部屋の端においてある紙袋を指差した。

「あ！すっかり忘れてた……。タカシ、お前持ってきてくれたのか？」

「肌身離さず持ち歩いてたっす。先輩、絶対現場に来ると思ってたっすから」

「タカシ、ありがとう……」

そう言いながら、圭は今ひとつ心ここにあらずな感じである。

「やっぱ、無理そうっすか？明後日なんて……。体きついっすか？」

圭の表情に気づいて、タカシが不安そうに聞いた。

「いや……、そうじゃなくて」

「なんっすか？」

「そうじゃなくてさ……。俺……、ほんとクビじゃないのか？」

「クビ？」

「だってほら、俺、撮影さんざんすっぱかしたみたいだし、いつもならボロクソに言ってくる監督が妙に優しいし……。それに……」

「それに？」

「……タカシ、お前……。せっかくのチャンスなのに……」

言いづらそうに圭は、タカシに背を向けた。

「ああ！もしかして誤解してないっすか？」

タカシはさもおかしそうに笑っている。

「誤解？」

その言葉に、圭はタカシの方へと向き直った。

「俺の格好、よく見なかったんすか？」

「見たよ、たしかにヴィルト・カツエだった」

「ブー。違います」

「違う？」

「あれは、『ケッツ・ヒエン』ですよ」

「ヘックシヨン？」

「ヘックシヨンじゃありません。『ケッツ・ヒエン』」

タカシは一文字一文字丁寧に発音した。

「なんだ、そりゃ？」

「『子猫』です」

「……？」

「ヴィルト・カツエの弟です」

「弟？」

「ヴィルト・カツエが風邪をひいたんで、急遽弟が応援に来たってことにしたんっす」

「そうなんだ」

「そうっすよ。先輩が現場にこないってんで、急いでコスチュームも作ったんっす。ほら、もう破けたり汚れたりして使えなくなったのがあるじゃないでっすか。それを衣装さんがなんとかリメイクして、俺の体型に合わせてくれたんっす。だから一瞬同じに見えるんですけど、一箇所だけ全然違うんっすよ」

「一箇所？」

「そうっす。あ、ちょっと待ってて下さい」

タカシはそう言って部屋を出ると、すぐに何かを持って帰ってきた。

「これっすよ」

差し出されたモノを見て圭は噴出しそうになったが、タカシの手前必死に堪えた。

「ほら、さっき俺が被ってたのはこれだったのに、先輩気づかなか

「たんつすか？」

それは、顔全体を覆うように作られた猫型のマスクだった。もちろん、ヴィルト・カツエに勝るとも劣らず……の代物である。

「実を言つと、最初は誰か代役を立てようって話になったんつす。時間もなかったし……。でも、監督がヴィルト・カツエはあいつにしかできない。何か事情があるんだろう。とにかくあいつが帰つて来るまでこれで場をつなごうって、押し切ったんつす」

「監督が……？」

「そうつす。ね、これで判りました？ヴィルト・カツエの代役はいないんつすよ。先輩、もっと自信持つて」

「ありがとう、タカシ。本当にお前はいい奴だな」

「いや、お礼を言うのは俺の方つす。だって、先輩が訳のわからない事に巻き込まれてくれたお陰で、俺も役がもらえたんつすから」

「そうか、俺の苦労も少しは役に立ったか」

圭はふんぞり返る振りをした。

「そうつすよ。俺、生まれて初めてセリフもらったんつす。全部先輩のお陰つす。いつも先輩の横にはりついててまるで弟みたいだから、お前がやれつて」

タカシは真剣な顔で頭を下げた。

「いや、タカシの実力だよ。それだけの理由で抜擢するほど監督は甘い人じゃない」

「そうつすか」

タカシは照れくさそうに頭をかいた。

「しかも監督が、評判が良ければ準レギュラーにしてもいいって言ってくれたつす」

「ほんとか、タカシ！それはすごいな。タカシならできる！頑張れよ！」

「はい！俺、なにがなんでも頑張るつす！先輩のためにも頑張るつす！」

真剣な眼差しで言うタカシを、圭は自分のことのようにうれしそ

うに見つめていた。

六

ゴミゴミと古い建物が立ち並ぶ路地に入ると、小さな雑居ビルの前で大杉は車を停めた。後ろに続いていた岩本は、ビルの駐車場に車を入れている。

「ここか？」

Kはビルを見ながら言うと、大杉はこくりとうなずいた。

「よし、それじゃボスと呼んでこい」

「なんだって！このヤロウ！さっきから黙って聞いてりやいい気になりやがって！」

大杉の怒声に、通行人が恐る恐る振り返った。

「いいのか、ほら見られてるぞ。目立ちたくないから、こんなオンボロビルを借りてるんだろう？」

「じゃあほしい！お前ごときがボスと呼んでこいなんて、百年早いんじゃない！失礼にも程があるうが！」

言葉強とは裏腹に、大杉の声は明らかに小さくなった。

「この状況で事務所にノコノコ入っていくバカがどこにいる？俺も自分の身はかわいいもんでね」

「なんだと、こりゃあ！いい加減にせえよ！」

「雑魚と話してるほど、俺も暇じゃないんだ。それに……」

言い掛けてKは、すみみをきかせた三白眼で大杉をにらみつけた。「そっちだって、時間はないんじゃないのか？それとも、俺以上の腕を持つ人間でも見つけたか？それならそれで俺は一向に構わんが」言われて大杉は観念したように、車を降りると岩本に目配せしてビルの中に入って行った。

十五分ほど経って、ようやく再び姿を現した大杉の後ろに櫻井が立っていた。Kは車を降りると、わざと恭しく櫻井に向かってお辞

儀をした。

「お会いできて光栄です」

後部座席のドアを開けて櫻井を誘うと、Kは反対側のドアを開けて櫻井の隣に座った。それを見て、大杉が助手席に、岩本が運転席にとすばやく乗り込んだ。

「秋葉原へ向かってもらおう。ここからならすぐのはずだ」

Kが声を掛けると、岩本は後部座席を振り返ってKをにらみつけた。

「オマエに命令される筋合いはねえ！」

「岩本」

正面を見据えたまま、櫻井は静かに言った。

「取り敢えずはお客人の言われたようにしなさい」

岩本がムツとした顔をしながらも、仕方なく車を発車させたが、それ以降Kも櫻井も口を開こうとしなかった。

ものの十分もしないうちに沈黙を乗せたままの車が秋葉原に近づく、ようやくKが口を開いた。

「蔵前橋通りに入って、左車線をゆつくりと走れ」

バックミラーを見ると、櫻井が静かにうなずいている。岩本は黙ってKに従った。

車が蔵前橋通りに入ると、Kは心持前かがみになり、何かを探しているようだった。

「よし、そのパーキングメーターに停めろ」

一応バックミラー越しに櫻井を確認して、岩本は指示されたパーキングメーターに車を停めた。

「なるほど」

ずっと黙っていた櫻井がようやく口をきいた。

「なかなか用心深いお人柄のようですね」

ここは、交通量も通行人の数も多い。目撃者の数が多すぎて、手を出すことは不可能だ。

「場数だけは踏んでるからな」

ぶつきらばうにKは答えた。

「しかし……、私どもにはどうにも解せないのですが……」

櫻井はもったいつけるように間をおいた。

「あんたたちも、それなりに調べはついているんだらう？」

「それは、もちろん出来る限りの事は致しました。どうやら、不可思議な人間違いをしましたようなのでね」

「人間違いだと、どうして言い切れる？」

櫻井はKに、数枚の写真を見せた。

「失礼だとは思いましたが、この三ヶ月のあなたの行動を見させて頂いておりました」

そこには、モスクワやベルリンでのKの姿が写っていた。

「それから、これも」

指し出されたのは、寝ているうちにとられた圭の写真だった。

「最初は何が何だかわかりませんでした。誰がどう見たって同一人物にしか思えない。しかし、念のために顔のデータを照合してみると、別人だという事が判明したのです」

さらに、櫻井はヴィルト・カツツエの写真を出した。

「もちろん、もう御存知でしょうが」

「できれば、知りたくはなかったがな」

何度見ても、Kには嫌な写真だ。

「しかし、これですべてが解決したわけではありませんよ」

「わかつてる。これのコトだらう」

そう言つと、Kはポケットから発信機を出した。

「なぜ、お持ちで？」

「簡単な話さ」

Kは不敵な笑みを櫻井に向けた。

「あんたら去年、元フランス傭兵部隊の男と接触したらう？」

櫻井の表情がぴくりと動いた。

「もつとも、その男はあんたらと会った次の日にはこの世にいなかったがな。それも、あんたらか？」

Kはさりげなく櫻井の表情をうかがった。

「身に覚えがありませんな。それで？」

「そいつにもらったんだよ」

「もらった？」

「まあ、正確に言つと多少の語意の違いはあるがな」

「なぜ？」

「そのうち使える時が来るかもしれんと思つてな。実際、使えただろう？」

「では、彼につけた方はどうなったのですかな？」

「彼？もしかして、あいつにも同じものをつけたのか」

「はい。しかし、港で発進はプツリと途切れました」

「そんなことまで、俺が知るかよ。それより、もう少しまともなモノを使うんだな。発信機の周波数くらいたまには変えろ」

それを聞くと、櫻井は不敵に笑い出した。

「聡明なあなたの事だ、そんな話を私が頭から信じるとは思つてはいらっしゃらないでしょう？」

「どういう意味だ？」

「あなたは私が思つていた以上に、いろいろと知つておられるようだ」

そう言つと、櫻井はベルリンとモスクワの写真を指差した。

「でも、私の方もあなたが思つている以上に知つているのですよ」

櫻井はポケットから、新たに二枚の写真を出した。それは、指を指した写真を拡大したものだった。

「私も用心深い性質でね」

拡大した写真には、Iの姿が写っていた。

「これでイーブンですね」

櫻井は楽しそうに笑っている。

「商談は明日、私の事務所しましょう。場所はお分かりですね。時間は追つて連絡させます」

そう言い残して、櫻井たちは車を降りていった。

部屋のドアを細く開けて隙間から廊下を覗き、誰もいないのを確認すると、カツチャ桃こと桐生愛理奈はそつと部屋の外へ出た。手には、ケーキの箱を持っている。

どうしよう……。でも、やっぱり心配だし……。いきなり行ったら、なんて思われるかしら……。迷惑かもしれないし……。でも……。

躊躇しつつも、足音を出さないようにそろそろと歩いていると、愛理奈は、背中に嫌な気配を感じた。

「愛ちゃん、そこでなにしてるの？」

聞こえてきたのは、カツチャ赤こと松下の声である。

愛理奈は決して感の良い方ではないが、どんな人間でも、なぜか嫌な予感程よく当たるものだ。

「いえ、別に」

ギクリとしつつも、振り向かずには早足で立ち去ろうとした愛理奈を、松下は容赦なく追いかけてきた。

「どこ行くの？ ケーキなんか持って」

「いえ……。あの……。あ、ファンの方に頂いたんですけど、私人じゃ食べ切れないから、どなたかにおすそ分けしようかなと思って……」

「ふーん、そうなの」

松下は不信顔だ。

「まさか、老いぼれの『山猫』に持って行くんじゃないよねえ？」
「ま、まさか。松下さん、何をおっしゃるんですか……。なんで私が十文字さんのところに……」

明らかに愛理奈は動揺している。が、松下は根性が悪いので更に畳み掛けた。

「そう？なんか愛ちゃんって、撮影の時とかよく山猫の方見てない？」

「……そうですか？」

悟られまいとして、愛理奈は必死で平静を装った。しかし、それはどう見ても無駄な努力でしかなかった。

「うん、だからもしかして、好きなのかなあと思ってさ」

「そ、そんなことはありません！」

強く否定しなければという緊張のあまり、愛の声はとうとう裏返ってしまった。

「そう。それならいいんだけどさ。そうだよ、愛ちゃんがあんな死にかけた老いぼれのことなんか、気にするはずがないもん」

「そ、そうですよ」

愛理奈の声は消え入るが如しである。

「そうだよ。ああ、なんか変な心配しちゃったな」

「すみません……」

「嫌だなあ、愛ちゃんが謝る事ないじゃない。じゃあ、それ、僕が食べようかな」

そう言つと、松下は愛の手から、半ば剥ぎ取るようにケーキの箱を受け取った。

「愛ちゃんも、僕の部屋で一緒にどう？」

「あの……、私は……、あの、ダイエット中なので……。ごめんなさい」

愛理奈は、泣きそうな顔で頭を下げた。

「そうなの？僕の誘いを断るんだ？」

「あ、そういうつもりじゃ……」

「冗談だよ。女優さんにダイエットって言われて、紳士の僕が引下らないわけないだろう？」

「は、はい……」

「じゃあ、ダイエットが終わったらすぐに教えてよ。そうしたら、ディナーでもどう？僕の行き付けのレストランに連れて行ってあ

げるよ。君はそんなところ、行ったことないだろう？」

「あ、あの……」

「じゃあ、頑張つて、さつさとダイエット終わらせてね」

言いながら松下は去って行ったが、途中愛理奈を振り返って、彼特有の驕った口調で言った。

「ああ、そうだ。片時も忘れちゃ駄目だよ。誰のおかげで愛ちゃんにカツチャ桃の役がついたのか」

愛理奈には、小さくうなずくことしかできなかった。

「明日もがんばろうねえ」

後手を振りながら松下は去っていった。

残された愛理奈は、部屋に帰る気にもなれず、さりとてやはり一人で圭の部屋を訪れる勇氣もなく、仕方なく宿の目の前にある公園へと向かった。

やっぱり心配だわ。監督さんは自衛隊仕込みのあいつなら大丈夫だろうなんて、のんきな事言っていたけれど……。もし、また誰かに襲われたりしたら……。

公園の入り口に差し掛かると、ひそひそと話す声が近づいてきた。
「しかし、あの山猫とんだ食わせもんでしたね」

山猫？

愛理奈は思わず身を木陰に潜め、会話に耳を立てた。

「まったくだ。余計な手間をかけさせやがって。それで、手はずは整ったのか？」

「はい、準備万端です。抜かりはありません」

「そうか。それはご苦労だったな。これで、山猫も……」

「もうじきお陀仏ってことです」

二人は愛理奈には気づかず、そのまま前を通り過ぎて行った。
どういうこと？山猫って、もしかしたら……。

愛理奈は急いで自分の部屋に戻ると、携帯電話を取り出した。

「もしもし？」

「おう、愛ちゃんか。どうしたの？」

相手の声には緊張感がない。

「あのね、大事なお願いがあるの」

愛理奈は急いで、今までの圭の事情を説明した。

「うーん、そりゃ大事な愛ちゃんのお願いだから、聞いてあげたいけど……」

相手は億劫そうな声を出した。

「お願い。ね、一生のお願い」

愛理奈は携帯を握り締めながら、何度も頭を下げている。

「そうは言ってもねえ、部署が違うし。大体、その程度の状況じゃ動けないことになってるんだよ」

「そんなこと言わないで」

普段は大人しい愛理奈が、必死に食い下がる。

「お願い。なんとかして！」

愛理奈は泣きそうな声を出した。

「お父さん！お願い！」

「でもねえ、証拠や動機もわからない件では、警察は動けないのよ。それくらい、愛ちゃんにもわかるでしょう」

慰めるように、竹之下は言った。

八

「そういえば、さつきトクさんから電話があつたつす。先輩、眠つてたから起こさなかったんつすけど」

風呂も夕食も終えて、圭とタカシは布団に寝転び、ビールを飲んでいた。

「トクさん？タカシ、トクさん知ってるのか？」

「はい。この間現場で一緒になったつす。そしたら、『お前が、圭の舎弟か？』って言われたつす」

「舎弟ねえ」

圭はくすくす笑っている。

「それで、トクさん何だつて？」

「先輩の事、事務所に聞いて驚いたって言ってたつす。それで、心配だから様子を見に来るつて」

「そんな、わざわざ……」

恐縮して圭が言いかけた時、何やら廊下が騒々しくなった。

「なんつすかね？」

言いながら立ち上がり、タカシがドアを開けようとすると、突然ドアが開いた。

「うわ！びつくりした」

「びつくりしてる場合じゃないぞ。ほら、台本の差し替え。明日までに頭に叩きこんでおけ」

言うなり、ADはタカシに数枚の紙を渡すと慌しく隣の部屋へ向かった。

ずっと向こうの方で、「ヤダヤダ。誰かさんのお陰でとんだ迷惑だぜ」とわざとらしく叫んでいる松下の声が聞こえる。

「おお！きたきた！」

言いながら、後手にドアをしめようとした瞬間、またもやドアが勢いよく開いた。

「ここに十文字さんいるよね？」

「いるつすけど」

「じゃあ、これ渡しといて。忘れるとこだった。じゃな」

と、再び慌しく廊下を走っていった。

タカシはその様子を部屋からクビを出してしっかりと見届け、今度は慎重にドアを閉めた。

「先輩……」

振り返ったタカシの声がなんだかおどろおどろしい。

「な、何だよ……」

その声音に、圭は思わず後ろずさった。

「一緒にかんばりましょうね！」

今度は一転して、異常に明るい声だ。差し出した手には、台本と数枚の紙。

「きつと、急いでヴィルト・カツツエのシーンを入れたんすよ」
圭が急いで渡された紙に目を通すと、そこには確かにヴィルト・カツツエのセリフがあった。

「でも、うれしいなあ。先輩と一緒に芝居ができるなんて。ほら、ここ見て下さいっすよ」

タカシが指差したところには、ヴィルト・カツツエとケッツ・ヒエンの会話が書き込まれていた。

撮影時間と圭の体のことを考えて、それはとても短いシーンだが、それでもタカシは天にも昇る心持であった。

「あれ……？先輩、ここ見てください！ここ！」

またもやタカシが慌てて、圭に指し示したところには、『復活したヴィルト・カツツエは新たに開発された銃型の武器を持っている』と書かれていた。

「銃型の武器……？」

「いったいどんなっすかね。シーンは短いっすけど、こりゃ滅茶苦茶インパクトあるっすよ。復活のヴィルト・カツツエは、新型の武器を持って帰ってきた！うわあ、かっこいいっすねえ。先輩絶対はまりますよ！」

「よせやい」

照れるとでる口癖がつい出てしまったが、次の瞬間圭はひどく真面目な顔になった。

「でもタカシ、ヴィルト・カツツエがかっこつけても、逆にかっこがつかないだろ」

「そうっすかねえ」

言いながらタカシは、かっこをつけているヴィルト・カツツエを想像して、思わず噴出した。

「それもそうっすね」

「だろ？」

つばに入ったらしく、タカシは目に涙をためて笑っている。

「それに、悪役はかつこよくちゃいけないんだよ」

「え？なんでですか？」

笑うのをやめて、タカシはキョトンとした。

「悪役がかつこよかったら、子供たちが悪役に憧れちゃうだろ」

「憧れちゃいけないんですか？」

「そりゃ、いけないだろ。やっぱり子供は正義のヒーローに憧れなきゃ。ヴィルト・カツエが子供たちに人気があるのは、かつこいからじゃない。その反対で、思い切りブザマで哀れだからだよ。子供たちは正義の味方に心酔しながらも、哀れな悪玉に同情してるのさ。駄目なやつだけど、がんばれよって。ヴィルト・カツエの人氣は、子供たちの優しさなんだ。それでいいんだよ」

「そんなもんですかね。でも、悪のヒーローと違ってよく言うじゃないですか」

タカシは不満顔だ。

「そんなもんなんだよ。悪のヒーローなんて、この世に存在するはずがないんだ。タカシだって、悪い人よりいい人の方がいいだろう？」

「そりゃそうですけど……。でも、もったいないなあと思って」

「何が？」

「だって、先輩が銃持ったらある意味ホンモノじゃないですか。絶対かつこいいと思ったのに」

「ホンモノって、お前、人をスナイパーみたいに言うなよ」

「似たようなもんじゃないですか。射撃でオリンピック出たんっすよね？」

「出てはいないよ」

「え？出てないんですか？」

「候補にはなってたけど、結局行かなかった」

「どうしてですか？」

それには答えず、圭は三本目のビールのフタをあけて一口飲んだ。

元来、酒に強い方ではない。もしかしたら、すでに酔っていたのかもしれない。それに、奇妙な事に巻き込まれたばかりの圭は、精神的にまだ不安定だった。

彼らは、俺の経歴を知って暗殺の依頼をしてきたのか……？まさか、本当のことを知っていたら、俺に依頼するはずはない……。でも、もしかまた目の前に現れたら……。

久しぶりに『本物』を手にした感触が、体と頭から離れない。手のひらにその重さが残る。

圭は今まで誰にも言えずにきたことを、タカシに吐露してしまいたくなった。

「タカシ、おまえ本物の銃を持ったことあるか？」

「ないっすよ。でも、グアムとかサイパンに行くことがあったら、絶対撃ちに行くっす」

「そうか……。タカシは本物を撃つてみたいのか」

「だって、かつこいいじゃないっすか。だから先輩もオリンピックの候補になるくらい、腕あげたんじゃないっすか？」

「最初は確かにそうだったのかもしれない……」

圭はゆつくりとビールを口に含んだ。

「練習して、上達して、それが楽しくて。でも俺は……、俺は当たり前のことに、ある日突然気づいたんだ……」

「当たり前のこと……、っすか？」

圭は小さくうなずいた。

「そう。あまりにも当たり前のこと」

「はあ？」

「そうしたら、その事が頭から離れなくなって……。結果、俺は銃を撃つことが出来なくなっちまったんだ」

「銃が撃てなくなった？あ、の、先輩の発言、オレにはいまいち意味がわからないっすけど」

タカシは困惑した顔を見せながら、ビールを飲んでいる。その様子を気に留めずに圭は続けた。

「モデルガンと本物の銃の違い。タカシ、わかるか？」

「違いつたって……、いまのモデルガンは一瞬警官でも見間違える程、精巧にできてるっすよね……。いや、俺にはちよっと、わかんないっす」

「違いはな、タカシ……」

圭は、悲しげで、しかも苦しげな顔をしている。

「人が殺せるかどうか……だ」

「あ……」

「それに気づいた時、俺は怖くなった。銃を撃つことが」

「……先輩」

「ばかだよな、俺……。自分でも情けないよ……。そんな子供でもわかることにすら気づかず、突然怖気づいて……。まわりに迷惑かけて」

「先輩……。そんなことないっすよ」

今にも泣き出しそうな圭をなだめるように、タカシは言った。

「俺の両親は爆破テロに巻き込まれて死んだ。その時たくさん人間が一瞬にして粉々になったんだ。でも、テロを起こした連中はヒーロー気取りで、声明文を発表した。我々が世界を救うと」

タカシは、必死に圭の話の真意を聞いている。

「そいつらを倒したくて……。でも、爆弾も銃も、人を殺すために作られてる。相手が持つから自分も持つ。身を守るために、自分も持つ。なあ、タカシなんかおかしくないか？」

タカシは圭をなぐさめるように、うなずいた。

「誰も持っていないきゃ、それが一番いいんじゃないかって、俺そう思っちゃったんだよ。でも、実際問題そんなこと言っていられないのもわかるし。きれいごとだけで、平和が訪れるわけがないこともわかってる。自分の考えがいかに子供っぽくて、幼稚なのかもわかってる。でも俺、考えれば考えるほど答えがわからなくなってる、どんどんわからなくなってる……。気づいたら、撃てなくなってる」

「先輩……。そんなこと誰にもわからないっすよ。きっと誰にも……」

…。でも、先輩はご両親のことがあるっすから、答えが欲しかったんっすね……」

タカシは静かに口を開いた。

「俺には難しくて、ほんつとにわかんないっすけど、でも今なら俺、なんで悪役がかっこよくちゃいけないのかはわかるっす。ほんの少しかもしれないけど、先輩の気持ちはわかるっす」

タカシが見つめる先の圭は、枕につつぶしている。

「ありがとう、タカシ……」

圭は枕につつぶしたまま、小さくそうつぶやくと、語ってしまっただ自分が急に照れくさくなって、わざと明るい顔をしながら顔をあげた。

「なんか、カッコ悪いな、俺」

「そうっすね！」

タカシも呼応するように、わざと明るい声を出した。

「でも、どんなにかっこ悪くっても、先輩はやっぱり俺のヒーローっす」

「ヒーロー？」

「そうっすよ。なんだか照れくさくて、今まで言えなかったんっすけど」

「なんだよ」

圭は起き上がって、タカシを軽く小突いた。

「俺、今まで目標とかなんも持ったことなくて。努力とかしたこともなく、人生ダラダラ過ごしてきたんっす。この世界に入ったのだから、友達に誘われてエキストラに登録したのがきっかけで、別に役者になろうと思ったわけじゃなかったんっす。でも俺……、うまく言えないっすけど……」

タカシは言葉を搜して、天井を見上げた。が、なかなか言葉は見つからない。

「なんていうか……、先輩のアクションを初めて見た時……、体に電流が走ったっす」

タカシは、ようやく言葉を見つけた。

「よせやい。まったくタカシは大袈裟だなあ」

だが、その言葉を聞いて圭はからかうように笑っている。

「本当っすよ」

圭の様子を見て、タカシは少しムキになった。

「本当なんっす。それに、どんなささいな役にも一生懸命な先輩見て、尊敬したっす。それで、俺、先輩みたいになりたたって、真剣に思ったっす。生まれて初めて、自分の目標を持ったんっす。そのためになら、どんな努力もできるって思ったんっす」

タカシの目はどんどん真剣になってきた。

「階段落ちを十七回やったのだって、すごい先輩らしくて……。やっぱ先輩はすごいって、本当は俺ひそかに感動してたっす。だから先輩は、誰がなんと言おうと、俺のヒーローなんっす！」

第六章 タカシ

—

翌朝。タカシが、まだ寝ている圭を起こさないようにそつと部屋を出ると、廊下に愛理奈の姿があった。

あれ？なんでこんなところに愛理奈さんが？

同じ宿に宿泊しているとはいっても、愛理奈たちの部屋は、タカシたちの部屋ともちろんグレードが違う。愛理奈たちは、立派な新館に部屋があるが、ここは古ぼけた旧館である。普通なら愛理奈がいるはずがない。

「あの……、なんか用っすか？」

不信そうにタカシは聞いた。彼は、その方面の事にはおそろしく鈍い。

「いえ……、あの……」

そう言った愛理奈の顔は、真っ赤になっている。

「あの……、なんでもないんです」

そう言っと、愛理奈は一目散に走り去ってしまった。

「なんなんだ？一体？真っ赤な顔して……」

首を傾げながら、タカシは集合場所である新館のホールへと向かった。

そこには、監督以下スタッフの他に、変身後のカッチャレンジャーを担当している役者らが、集まっていた。

今日は、アクションシーンのリハーサルから行われることになっている。

現場は昨日と違って、宿から歩いて十分ほどの石灰岩採掘場跡地。ヒーローもののアクションの基本的場所だ。

現場に着くと、さっそくリハーサルが始まった。今日は爆薬を使うシーンが多い。それゆえに、いつもよりも念入りにアクション指

導がなされている。

一歩間違えば大事故になりかねない。たった一秒のずれが、命の危険を呼び起こす。だから、説明をきくタカシたちの顔も真剣そのものだ。

いつもよりも長めのリハーサルを終えて、ようやくタカシたちが一息入れていると、松下ら、イケメンカッチャメンバーが現場に現れた。

この後は、彼らのリハーサルの予定なのである。

松下の隣には、分厚い眼鏡をかけた、見慣れないおばさんがいる。権現寺郁子。年は五十がらみといったところだろうか。

「いやあ、×製菓の会長のお姉さまが僕のファンだなんて、本当に光栄だなあ。」

松下は、わざとまわりに聞こえるように話している。

×製菓？ ああ、番組スポンサーの一社かあ。ただのおばさんじゃないんだ。

そう思いながら良く見れば、確かに地味ではあるが、仕立てのよさそうなパンツスーツを着ている。となると、耳元の大きなダイヤのイヤリングも、本物かもしれない。

「いい年をしてと思われるかもしれませんが、あなたの活躍を見るのが毎週楽しみです」

「そうですか。よく言われるんですけど、やっぱり何度聞いてもうれしいですねえ」

松下の声はさらに高くなった。

「郁子様は、バイオリンをなさるんですか？」

「ええ、あまり上手くはありませんけれど。このあとお稽古ですの」
郁子は、胸にバイオリンケースをしっかりと抱いていた。

「お持ちしますよ」

「いえ、いえ大事なものですので。車に置いておけばいいのでしょうが、とにかく側にないと不安で……」

郁子は、ちらりと松下を見た。

「おかしいですわよね」

「いあ、そんなことはありませんよ。僕もピアノをやるんでお気持ちちは分かります。僕だって、できれば愛用のベーゼンドルファーを持って歩きたいと思いますもの」

「ですわよねえ」

そう言うと、二人は顔を見合わせて楽しそうに笑った。

「ところで、ヴィルト・カツツエをやつてらっしゃるのはどなた？ テレビではお顔がよくわからないから……」

郁子はまわりを見渡しながらかうと、松下はとても分かりやすく嫌な顔をした。

「今日はいませんよ」

「あら？ どうしてですの？」

「無断で撮影をすっぱかした挙句に、具合が悪いとか言つて、今日は宿で寝てます」

「まあ……。宿でお休みになってますの。でも、それなら安心ですわね」

「え……。安心？ 何が安心なんですか？」

松下は郁子の言葉に怪訝な顔をした。

「え、あら私、そんな事言いましたかしら？」

「ええ、確かにそれなら安心ですわねつて、おっしゃいましたけど」

「あら、嫌だわ。年をとるとほんの少し前のことまで忘れてしまつて……。ごめんあそばせ」

「いや、年だなんて。郁子様は十分お若いですよ」

それから松下のお世辞は、延々と続いた……。

タカシにも二人の会話は聞こえていたが、あまり気にもとめず、無意識に愛理奈の姿を目で探した。知らずの内に、今朝のことが気になっていたのかもしれない。

はしゃいでいる松下から少し離れて、愛理奈は立っていた。が、その視線は松下とは間逆に向けられていた。

本当に、大丈夫かしら……。

不安にかられながら、愛理奈はぼんやりと山の上の雲を見ていた。すると、山の上にいる二人の男の姿が、突然愛理奈の目に飛び込んできた。

それはほんの一瞬のことだったのだが、

あの人たちは、昨日の！

愛理奈は確信した。

間違いないわ……。でも、どうしてこんなところに……。？もしかして……。

タカシは気づかなかったのだが、愛理奈の顔は朝とは正反対に、どンドン青ざめていった。

愛理奈はいてもたってもいられなくなり、意を決して走り出した。「あ、愛ちゃん！どこ行くの？もうリハーサルが始まるよ。ねえ、愛ちゃん！」

背中で松下の粘っこい声が聞こえたが、愛理奈はそれを無視した。とにかく人気のないところまで行かなければ……。

どれ位走ったのだろう。後ろを振り返り、誰も追って来ない事を確信すると、愛理奈はポケットから携帯電話を取り出した。

二

Kは指定された時間通りに、櫻井の事務所を訪れた。古びたビルの一階。エレベーターすらない。中に入らずとも、部屋の狭さは想像できた。

今日のKは例の格好とは対照的に、とてもラフな服装をしている。ジーンズにフライトジャケット、黒のタートルネックセーター。もちろん、その下にはしっかり薄手の防弾チョッキを着込んでいるが、部屋の前まで来ると、Kはノックもせずいきなりドアを開けた。「来てやったぞ」

その態度に、若い衆がいきり立ったが、そんなことを気にするK

ではない。

「ボディチェックなんて面倒なことはするなよ。俺にはあんたらを消しても、メリットはないんだからな」

言いながら、Kはわざとジャケットをめくって、シヨルダーホルスターに収められた銃を見せた。

「そうですかな？」

部屋の作りの粗末さに似合わぬ、上等なソファーに座ったまま櫻井が口を開いた。

「そうだろ。弾丸だってただじゃないんだ」

「以外と儉約家であられる」

自分の目の前のソファーにKを誘いながら、櫻井はさもおかしそうに笑った。

「無駄なことをしたくないだけさ」

Kはうながされるままに、櫻井の前に置いてあるソファーに座りこんだ。

「それにしても、今日はまた随分とラフな格好でいらっしやるのですね」

櫻井は何気なくそう言ったが、その声とは裏腹に、両の目はヘビのようにKを舐め回している。

「ああ、幸い、なにを着ても似合うもんでね」

その目を気にするでもなく、Kはぶっきらぼうに言い放った。
「なるほど」

櫻井は笑顔を見せたが、目の光かたは変わらない。

「さて、季節の挨拶はこの辺までにして、さっさと話をすすめてくれないか」

櫻井はKの言葉に頷くと、ポケットから一枚の写真を出して、Kに渡した。

「これが、ターゲットです」

そこには、銀色の髪と透き通るような青い瞳をもつ、北欧系の見本のような青年の姿があった。

「フィンランドの天才科学者、ヤルヒ・アシカイネン。今日の午後来日します」

「らしいな。それで日本中大騒ぎだ。アインシュタイン依頼の大物科学者の来日ってわけだ。最も、原爆の基礎を作ったアインシュタインと違って、こっちは平和の科学者って訳だ……」

Kは半分ひとりごちるように言った。

「こちらがスケジュールです」

櫻井はポケットから、今度は一枚の紙を取り出した。

「滞在は一週間……か。で、こんなもの渡して、俺に何をしろって？」

「何をつて……？」

「俺はエスパーじゃないからな。依頼主の思惑と俺の考えが違う場合もある。だから俺は、依頼主に依頼内容をはっきりと言わせる主義でね。さっきも言ったが、無駄なことはしたくないんだ」

「なるほど……」

面倒な奴だ、と言った表情で櫻井はKを見た。

「ターゲット、ヤルヒ・アシカイネンを日本滞在中にこの世から消して頂きたい」

わざと念を押すように櫻井が言うと、ニヤリとKは笑った。実に満足気に。

「これでよろしいですか？」

「上等だ」

そう言うとKはソファから立ち上がった。

「それは良かった」

「しかし、お前んとこのテロ組織が、死の商人もやっていたとはな。そとくりや、こんな奴に長生きされたら、たまったもんじゃないだろう」

ジャケットの裾を直しつつ、Kは櫻井の表情を窺った。

「何をおっしゃっているのか、私にはわかりかねますが……。余計な詮索するのは、あなたのいうところの無駄なことになりません

か」

櫻井も心得たもの、表情を読ませない。

「俺をやとうのは安くない。本当に払ってもらえるのかどうか、確認するのは無駄じゃないだろう。一体どこから資金を調達してるのかと思えば、そんなおシャレなサイドビジネスをやっていたとはな」
言いながらKはドアへと歩き出したが、何かを思い出したようにふいに振り向いた。

「そういえば、腰巾着がないな。尾行なんて面倒なことをされる位なら、助手席に乗せてやるぞ」

それを聞いて、櫻井は笑い出した。

「ご心配にはおよびません。あなたの無駄を省くために、大杉は別働隊を指揮しております」

「俺の無駄？」

「本来ならその件もあなたにお願いしたかったのですが、なにしろあなたはお安くはないのでね。しかも、彼には科学者殿のような大袈裟な護衛がついているわけではない。大杉だけでも、なんとかあります。それに……」

櫻井はいやらしく間を開けた。

「いくらあなたでも、自分そっくりの人間を撃つのは、気が引けるでしょう？」

それを聞くと、Kは不遜な笑みを残して部屋を出た。

部屋を出ると、Kは彼独特の優雅な足取りで狭い階段をゆったりと下がった。

が、ビルの角を曲がり、尾行が着いてこないのを確認すると、Kの動きは突然忙しなくなった。

ビルの近くのコインパーキングまで全力疾走で向かい、停めてあった車に飛び乗ると、Kは急いでヘッドセットを装着した。

「F、聞こえますか」

「ああ、聞こえてるよ。首尾は上々だ。何もかも計画通りに進んでいる、安心してくれ。それより……」

「わかっています。これから急いで向かいます」

「そうしてくれ。いいか、先を越されるんじゃないぞ」

「はい」

そう言つと、Kは車を急発進させた。

三

同じ頃、たまりにたまつた書類と格闘している北村の背後から、ドスの聞いた声が響いた。

「北村、竹之下は？」

係長だ。

「はい？あの、そこにいますけど……」

北村は目の前の席を指差した。

そこには、相も変わらずのんびりとたばこをふかし、スポーツ新聞を読んでいる竹之下の姿があつた。

「……。珍しすぎて気づかなかつたよ。俺はこの課に配属になつてから、竹之下が自分の席にいるのを初めて見た気がする」

「いやいや、ほら、俺はいやな事はすぐに忘れる主義だから、ちょいちよい自分の席も忘れちゃうんだよねえ」

竹之下は、スポーツ新聞をたたみながら言つた。

ついでに、警視庁へ来る道も忘れて、二度とここに現れなければいいのにと、北村は思った。

「で、なに？もしかして、俺に用？」

「ま、がんばれよ！」

竹之下を無視して、係長は北村に紙切れを渡した。

それを見るなり北村は、げんなりとした声を出した。

「ええ、またですかぁ……。結局この間のも、本当にガセだったし。これもどうせ、ガセなんじゃないですかぁ」

すると、次の瞬間、今日もきれいな銀河系が、北村の頭上を照ら

した。

席に戻っていく係長を憎憎しげに見送ると、北村は竹之下の方へ向き直った。

「竹之下さん、ありえないっすよこれ」

「ああん？」

「今日の午後、カツチャレンジャーのロケ地で麻薬取引、なんて……。誰がどう聞いても無理がありますよ」

それを聞いて、竹之下はケタケタと笑い出した。

我が娘は、そういう手にでたか……。こりやついでに、相手の男の顔もおがまんといかん。

竹之下は、そういうことにだけは敏感だ。

「仕方ないだろう。お仕事、お仕事。私ら真面目な公務員。今日も元気に公務に励みましょう」

変な節をつけて歌いながら、竹之下は北村より先に立ち上がった。「もしかして、熱でもあるんですか？」

その様子を見て、北村は見てはいけないものを見たような気がした。

「あ！さすがの竹之下さんもショックなんだろう？そりやそうですよね。こんなもの、真に受ける方が変ですよ」

ぼやき続けながら、北村も仕方なく立ち上がった。

「お前、感が鈍いなあ」

エレベーターの方へと歩きながら、竹之下は北村に言った。

「……？」

「もしかしたらこのヤマは、警視総監賞ものかもしれないぞ」

竹之下はわざと、少し真面目な顔を試みせた。

「まったく、どうしてそう、口からでまかせがポンポン出せるんですかねえ」

北村は相手にしていない。

「そりや、北村。亀の甲より年の劫って言うてな……」

「竹之下さん、それ微妙に使い方間違ってますよ」

「そう?」

「そうです。基本的に竹之下さんには、当てはまりませんから」
言いながら二人は、やってきたエレベーターに乗り込んだ。

四

圭が目を覚ました時、宿は閑散として物音一つしなかった。

腹が減ったなあ。

そう思って周囲を見渡してみると、隅におかれたちゃぶ台の上に、おにぎりが二つと手紙が置いてあった。

圭はおにぎりより先に、手紙を手にとった。手紙には、

『先輩へ 現場に行ってきます。今日はおとなしく寝てなきゃダメですよ。先輩の好きなチーズケーキ買って帰りますから、楽しみに待ってて下さい。 タカシ』

と、書かれていた。

タカシのやつ……。大丈夫、今日はおとなしくしているよ。

圭はお茶を入ると、台本を読みながらおにぎりをほおばった。

食事を終え、さて食後の一服と思ったが、箱にはタバコが一本しか入っていない。

最後の一本に火を点けながら、圭はタカシの顔を思い浮かべた。

携帯かけて、帰りにタカシにタバコを買ってきてもらうか……。でもなあ、撮影はいつ終わるかわからないし……。タカシも、タバコを買いに行くくらい許してくれるかなあ?

一応、考える振りはしてみたが、圭の心はとくに決まっていた。宿の中にタバコの自販機くらいあるだろうし……。でも、さすがにこの格好はまずいか……。

宿の浴衣は圭には丈が短すぎて、すねが半分見えている。まるで、懐かしのコントのようだ。さすがにこの格好で部屋を出る気にはなれず、圭は紙袋から自分の服を取り出すと、着替えにかかった。

古びたジーンズに、白いつくりのセーター。

これは、どうしようかな？ま、一応着ていくか。

少し悩みながら羽織ったのは、フライトジャケット！

廊下に出て、ホールへ向かうと案の定そこに自販機があった。がしかし、日ごろ圭が愛煙している銘柄がそこにはなかった。

黙ってりゃわかんないか。それに、何か甘いものも食べたいし……。

一瞬にして圭の心は決まった。

フロントで、コンビニの場所を聞くと、国道沿いを歩いて、十分ほどのところにあるという。道は単純だ。

まだ痛む足をかばいながら、圭はゆっくりと教えられた道を歩いていった。

国道の狭い歩道を数メートルほど歩いたところで、圭は何気なく後方を見やった。

青年が、五十メートルほど後ろを歩いているのが見える。それと、自転車に乗ったおばちゃんが一人。

人、少ないなあ。この辺も過疎化が進んでいるのかな。

なんとなくそんな事を考えていると、おばちゃんの乗った自転車が勢いよく圭を追い越して行った。圭はそれをよけようとして自分の靴ひもを踏んでしまい、危つくこけそうになった。

あぶないなあ、まったく。狭いんだから、無理に歩道走らなくても……。

ひとりごちて、圭は靴ひもを結びなおそうとしてしゃがみ、安全確認のため再び後方を見た。先ほど見た青年が歩いている。距離は、やはり五十メートルくらいか。

足の痛みでゆっくりとしか歩けない圭は、青年を先に行かせてしまおうと考え、わざとゆっくり靴ひもを結んだ。

その様子に気づいたのか、青年は少し早足になって圭に近づいてきた。背は百七十センチくらいだろうか。歩幅はあまり広くなさそうだ。

青年が圭の横を抜け去りると、圭は立ち上がって再びゆっくりと歩き出した。前方の青年との距離は徐々に離れて行く。目当てのコンビニに着く頃には、その姿はまったく見えなくなっていた。

圭はタバコとチョコレートを買うとすぐに店を出た。そして、宿の方へと二・三步歩き出したが、愛読している雑誌の発売日が今日だったのを思い出して踵を返した。すると……、先ほどの青年が遠くの方から圭を見ている。青年はすぐに姿を隠したが、その様子がさらに圭を不安にさせた。

もしかして、尾行されてる……？

今の圭には思い当たるフシがありすぎる程ある。

逃げなきゃ！

とっさにそう思っ、圭は足の痛みも忘れてやみくもに走り出した。男が追ってきているのか、確認する余裕すらないまま、ただがむしやらに走った。

尾行されていたとなれば、当然宿のことも知っているだろう。

どこに逃げりゃいいだよ！これじゃ、昨日と同じじゃないか！前方に国道が交わる交差点が見える。幸い信号は青になったばかりだ。圭は加速をつけて交差点を渡ると、感を頼りに右へと曲がった。

すると、すぐに信号のない小さな交差点があり、その角からは三メートルを越す高さの塀が延々と続いている。

確か、あいつ背はそんなに高くなかったよな……。

走りながら圭は、タバコとチョコレートをポケットにねじ込み、交差点を渡ると、勢いよくその塀に向かってジャンプをした。すると、手がギリギリ塀の縁にかかった。

こういうのも、昔よくやったなあ。自衛隊に入ったのも、実は無駄じゃなかったのかも……。

圭は腕の力だけで塀をよじ登ると、一気に塀の中へ飛び降りた。振り返って壁の上方を見る。聞き耳を立てた。しかし、追ってくる気配はない。それを確認すると、圭はその場に崩れ落ちた。

「まったく、なんなんだよ。今度はどっちだ？」

取り合えず落ち着こうとして、圭は買ったばかりのタバコの封を切り、常に内ポケットに入れてある百円ライターで、タバコに火を点けた。

ふうっ、とおいしそうにタバコの煙を吐く圭の眼前には、荒涼とした風景が広がっている。

どう見ても、石灰岩採掘場だよなあ。と言う事は、今日の現場だよな、ここ。

思わず、タカシの怒った顔が頭に浮かんだ。

だからって、一人で宿に帰るわけにもいかないし……。ロケ隊見つけて、事情を説明するしかないよな……。

またタカシに心配をかけるのかと思うと、圭は気が引けた。

仕方ないよな。早くしないと、またどんな目にあうかも分からないし……。いくらなんでも、俺ももう限界だあ。

一服し終わると、圭は重い腰を上げた。

その時！どこからか、ドーンという爆破音が聞こえてきた。

ああ、やってる、やってる。

圭はそう思って、せっかくだからタカシの熱演を見ようと、爆破音のする方へと歩き出した。

ドーン、ドーン。連続して爆破音が炸裂する。

今日は派手だなあ。

と知っている、眼下に逃げ惑うタカシことケッツ・ヒエンの姿が見えた。

だが、見えるのはタカシの姿とカメラ用のクレーンだけだった。スタッフは、ずっと後方の安全なところにいるのだらう。

へえ、案外とやるじゃないか。

ケッツ・ヒエンは、次々と襲い来る爆破を、すんでの所でかわしながら逃げている。実に絶妙なタイミングだ。スリル満点。

これなら、レギュラーになるのも確実だな。

そう思って圭は思わずニコリとした。

が、次の瞬間……。今までに聞いたことのないような凄まじい爆破音が、連続して圭の耳をつんざいた。と、同時にものすごい爆風が起こり、その爆風で吹き飛ばされたタカシの姿は、みるみるうちに立ち上がる巨大な爆煙に飲み込まれていった。

「タカシ！」

考えている余地はなかった。圭は思わず、その爆煙に向かって走り出した。

「タカシ！タカシ！」

もうもつたる爆煙の中、圭は必死にタカシの名前を叫んでいる。

爆煙でまわりがよく見えない。煙が目にしみる。それでも、圭は手の甲で目をこすりながら、懸命にタカシを探した。

「タカシ！どこだ！返事をしてくれ！タカシ！」

しかし、いくら叫んでも返事は帰ってこない。

「タカシ！」

ようやく倒れているタカシを見つけると、圭は急いでそのぐったりとした体を抱き起こした。

「大丈夫か？しっかりしろ！」

「先輩……」

タカシの衣装はボロボロに破け、ところどころ皮膚がむき出しになっていた。そして、数え切れない程の破片が体中に突き刺さり、体の至るところから勢いよく血が溢れだしている。骨も何箇所か折れているようだ。手足が不自然な方向に曲がっている。

「タカシ、大丈夫だ。今助けてやるから」

励ましながら、圭はタカシのボロボロになった猫型のマスクを外した。

「先輩……」

「しゃべるな、タカシ。体に力をいれないで！」

圭はジャケットの袖口で、血に染まったタカシの顔を丁寧に拭いていった。

その二人の様子を、高台から大杉と岩本がみていた。

「ばかやろう！また間違えやがって」

大杉の鉄拳が、岩本に飛んだ。

「すいません。この落とし前は、きちんとつけさせてもらいます」

そう言うのと岩本は圭たちに向かって自動小銃を構えた。

「やろう！ふざけたまねしやがって」

その声に圭が振り返った。

「今度こそ、ぶっ殺したる！」

そう吼えると、岩本は圭たちに向かって自動小銃を乱射し始めた。すると、大杉も負けじとライフルを構えた。次々と弾丸が圭たちに襲いかかる。

「危ない！来るな！逃げろ！」

異変に気づいて近づいてきたスタッフを一括すると、圭はタカシを抱えて爆発でできたくぼみに身を潜めた。

スタッフがその光景に驚いて、あわてて逃げて行く中、一人圭たちの方へ向かってくる人影があった。カッチャ赤のファンだというあのおばちゃん、権現寺郁子だ。

「タカシ。心配するな。大丈夫だから。絶対に助けてやるから……」
後方を気にしつつ、圭はタカシに精一杯優しく話しかけた。

その時、圭は気づかなかったのだが、銃弾をかわしながら、圭たちから五メートル程離れたくぼみに、バイオリンケースを抱えたままの郁子が飛び込んできた！

「K！大丈夫！」

叫んでみたが、その声は銃声にかき消された。

「先輩……。俺……」

「しゃべるな、タカシ！頼むから……」

圭はなだめるように、タカシの頭をなでた。すると、タカシは圭の顔を見て微かに微笑んだ。
しかし……。

「俺……競演、したかったっす……」

そう言って、一瞬遠い目を見ると、まぶたはすぐに閉じられ、そ

してその瞳は二度と開かれることなく……。

「タカシ！タカシ！」

圭の悲痛な叫びも、もうタカシには聞こえない……。

圭は強くタカシの体を抱きしめた。涙が頬をつたう。激しく続く乱射の音すら、耳に入らないかのようにだった。

その様子に心を痛めながら、郁子は急いでバイオリンケースを開けた。中に入っていたのは、M4カービン、小型のライフル銃だ……。郁子は、分厚い眼鏡を乱暴に放り投げると、ケースからライフルを取り出し、手慣れた様子で弾倉を装着した。

銃声はやみそうもない。しかも圭の至近距離に、次々と弾丸が降ってくる。岩本はともかく、大杉の腕は悪くないらしい……。

郁子がちらりと横をみやると、圭が静かにタカシの体をその場に寝かせ、自分のジャケットを脱いで、その上に掛けてやっているのが見えた。

郁子はライフルを構えると、岩本に照準を合わせた。そして、引き金を引こうとしたその瞬間……、それに気づいた大杉の放った銃弾が、郁子の右手を打ちぬいた。

「きゃあ！」

悲鳴を聞いて、圭は初めて郁子の方を向いた。と、同時に、衝撃で郁子の手から離れたライフルが目飛び込んできた。

とっさに手を伸ばした。が、届きそうに届かない……。その間も弾丸は雨のように降ってくる。圭は手を伸ばしたり、ひっこめたりしながらも、なんとかライフルを取ろうとした。

と、圭の手を狙った一発の銃弾が、ライフルをかすめた。するとその衝撃で、ライフルの位置が少しずれた。

しめた。届くぞ……。

圭が急いで手を伸ばすと、その手が今度はしっかりとライフルをつかんだ。

ライフルを持った途端に、圭の脳裏でタカシの悲愴な姿と、両親の面影とが重なった。最早圭に躊躇する気持ちはない。今圭の心の

底にあるのは、燃えたぎる憎しみの炎だけである。意を決した圭は、文字通り復讐の鬼と化した。

腹ばいになり、窪みに体を隠しながら圭はすばやくライフルを構えた。大杉と岩本までの距離はおよそ百メートル。圭にとっては、短すぎるといってもいいくらいだ。

その姿を見て郁子は焦った。

Kとは構え方が違う……。ということは……。どうしてここに！

「圭太郎君！駄目よ。やめて！」

しかしその声は、今の圭の耳に到底届くはずはなく……。
圭はじつくりと間合いを計った。

時を同じくして、竹之下と北村は、圭のいる位置とは反対方向にある、倉庫らしき小屋にようやくたどり着いた。小屋の窓からは、大杉と岩本の姿が見える。

「思ったより簡単にここまで来れちゃったねえ」

大杉と岩本は圭たちに夢中で、背後にしのびよる竹之下と北村には全く気づかなかつたらしい。

「……」

この期に及んでも、のんびりした口調の竹之下に対し、北村は緊張のあまり口も利けなくなっている。

いくら背後から忍び寄ったとは言っても、いつ何時気づかれて銃口を自分に向けられるか分からない状況だったのだ。その上、小屋にたどり着くまでには、隠れる場所など何もなかった。北村はそれを考えると、生きた心地がしない。

しかし、竹之下のペースはいつもと全く代わらなかった。

「それにしても、まあ、派手なことしちゃって……」

「……」

「面白いから、もう少し見学してる？」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！」

「あ、やっ」と口利いた

「……………」

「仕方ないなあ。北村ちよつと、お前の拳銃貸して」

「何するんですか」

「いいから、いいから」

そう言つと、竹之下は北村の手から拳銃をもぎとり、窓をそつと開けると、岩本と大杉に拳銃の照準を合わせた。

「無理ですよ竹之下さん！その銃で狙うには、距離があります！」

「そうなの？じゃあ、やめとこうかな……………」

竹之下は素直に、銃を持つ手をおろした。

同時刻、Kはまた別の角度でライフルを構えていた。壊れて放置されているシヨベルカーの後ろに身を隠しながら……。距離は約二百メートル。

ほんの一瞬、銃弾が途切れた。

今だ！

圭の全身を緊張が覆う。競技会の時とは全く違う種類の汗が、じわりと皮膚に滲み出てきた。

タカシ！これが俺の出した答えだ！

悲壮な決意の元、照準を合わせ、圭が引き金を引こうとしたその瞬間……………！

どこからか、発射音が数発聞こえた。が、無常にも弾はまったく大杉と岩本にかすりもしなかった。と、それとほぼ同時に、別の方角から二人に向かって二発の弾丸が飛んだ。すると、こちらの弾は実に正確に、大杉と岩本のくるぶしを打ち抜いた。

「ぎゃあ」

悲鳴をあげながら、大杉と岩本がもんどり打って転がり落ちてくる。

それを見て圭は立ち上がり、今度はゆっくりと二人に照準を合わせる。

せた。

タカシ！見ていてくれ！

その時！

「圭！やめろー！やめるんだ！」

徳永の声が、荒涼とした大地に響いた。

圭が声の方向を探すと、彼方から徳永が叫びながら走ってきている。

が、次の瞬間までもや圭は照準を合わせなおした。

「やめろ！聞いてくれ！圭！」

喘ぎながらも、徳永はさらに叫んだ。

「とめないで下さい。トクさん！」

「ダメだ！やめるんだ！」

徳永はそれでも、走りながら必死に圭に叫び続け、ようやく圭の側までたどり着いた。

しかし、圭は照準を合わせたまま、ピクリとも動かない。獲物を狙う猛獣のように冷酷な目をしている。

その瞳に不安を覚えつつ、徳永は喘ぎを必死に抑えて静かに口を開いた。

「圭、あのテロの首謀者が捕まったよ」

「え……？」

徳永が何を言い出したのか、一瞬圭には理解できなかった。

「今さっきニュースでやってた。取り合えずは、別件で逮捕したらしいが、テロの首謀者である証拠も、警察はすでに抑えているらしい」

「……」

それを聞いても、獲物を睨み付けるような圭の瞳は変わらない。

「首謀者の櫻井って男は、子供の頃、冤罪で父親を処刑されたそうだ。それで、世間への復讐を胸に誓って、テロリストになったらしい……」

「そんな……」

圭の脳裏に、優しく笑う両親の姿が浮かび上がった。

「復讐は復讐を呼び起こす。どこかで断ち切らなきゃならん」

そこまで言って、徳永は一呼吸おいた。

「それが一番良く分かっているのは、圭、お前自身じゃないのか…」

…？

圭の手から静かにライフルが離れた。

「トクさん……」

徳永は静かに圭に近寄ると、その肩を背後から握り締めた。

「今は何も言わなくいい。言葉で考えようなんてことはするな。ここで分かっただけいいんだよ」

そう言って、圭の胸をポンポンと叩いた。

圭の目はいつもの優しく瞳に戻っていった。が、そこに涙はなく、その代わりに今まで圭の瞳にはなかった、意思の強い光が加わっていた。

エピソード

「でもまあ、ものは試しつていうからなあ。ちよつくらやってみつか」

間延びした声を出しながら、竹之下は一度降ろしかけた手を再び構えた。すると、ほんの一瞬、竹之下の顔つきが変わった。普段の竹之下からは間違つても想像もできないような真剣な顔だ。

その表情に、北村が思わずたじろいた次の瞬間！二発の弾丸が、勢いよく拳銃から放たれた。

弾道はまっすぐに、大杉と岩本へ伸びていき、弾丸はそれぞれの踝の中にのめり込んでいった。

「あら、当たっちゃったよ。やってみるもんだねえ」

北村の方を振り向いた竹之下の顔は、いつもの間の抜けた表情に戻っていた。

「まさか！この距離で……」

崩れ落ちて、向こう側に転がっていく大杉と岩本を見て、北村はただ口を半開きにして啞然としている。

「あ、北村、これありがとね」

その様子を気にとめる風もなく、竹之下は北村に拳銃を返した。

「これで、警視総監賞も決まりだな。お前、いい腕してるじゃない」「どういう意味ですか……？」

「あいつらは、お前がしとめたってことだよ。いいか、もし俺の腕がばれたら……」

竹之下は声をひそめた。

「ばれたら？」

北村の顔に緊張が走る。

「俺の仕事が増えちゃうかもしれないじゃない」

北村の口は再び半開きになった。

「さてと……、県警が来ちゃう前に捕獲しにいくとするか」

竹之下に肩を叩かれて、ようやく北村は我にかえった。

「そうですね」

言いながら、北村は竹之下の顔をまじまじと見た。

「なんだよ。俺があんまりいい男だからって、そんなに見つめるなよ」

「いえ、それは絶対にはいですけど。ただ……」

「ただ？」

「竹之下さんだよなって思って」

「それ、どういう意味？」

「別人じゃないよなって」

「お前そりゃ、俺みたいにダンディな男が二人も三人もいたら、世の中の女性がどっちにしたらいいか決めかねて、悩んじゃうじゃないの」

ばかばかしくなつて、北村は竹之下を置いて高台へと歩き出した。

「あ、待ってよ！ちよつと、北村！老体は労わるもんだと昔から決まっているんだぞ！おい！」

慌てて竹之下も後を追った。

高台から下を見渡すと、呻きながら転がっている大杉と岩本の姿があった。

やつぱり、夢じゃなかったんだ……。

北村はそれを見て、改めて竹之下の顔をじつと見た。

「だから、見つめるのはやめなさいって！北村、素直に諦めてくれ。俺にはその趣味はない」

再びばかりしくなつて、竹之下から視線をそらすと、そこには果然と立っている圭の姿が見えた。

あれ、あの顔……。どこかで見たような……。

「あ！思い出した！なんだ、そういう事が……」

すつとんきような北村の声に、反応したのは郁子だった。

まずいわ……。

郁子は急いで圭の足元に落ちているライフルを拾うと、すぐさま

逃げるように立ち去って行った。

都心へと車を飛ばすKの横には、老けたメイクを施したIが座っていた。

「もう少し丁寧な運転ができないの？傷にひびくじゃないの！」

みれば、Iの右手には痛々しく包帯が巻かれている。

「知るかそんなもん。自分のドジのせいだろう」

Kは相変わらず、つつけんどんだ。

「そりゃそうだけど……」

「そうだろ？」

「でも、人の事ばかり言ってられる立場じゃないでしょう？」

「……」

珍しくKの顔色が変わった。

新橋。うらさびれた空間に、疲れたサラリーマンが集うガード下の飲み屋。そのまったりとした雰囲気、二人の姿は絶妙にマッチしていた。

「悪かったな。お前んとこの若いモン巻き込んで。まさか護衛につけていた奴がまかれちまうとは……」

言いながら、西田は徳永に酒を注いだ。

「いや、お前が謝ることじゃないよ」

注がれた酒を、徳永はうまそうに飲み干した。

「でも、ひやひやしたぜ。あの状況で圭に本気を出されたら、どうにもできんからな」

徳永はすでに手酌で飲んでいる。

「いつそうちのと交換したいよ」

西田はため息をついた。

「うちのつて？」

「ほら、例の圭太郎君にそっくりなやつ」

「ああ。でも、なんで？」

「あいつは、嫌味なくらいなんでもできて、度胸もあるくせに、これだけはまるつきり駄目なんだ」

西田は鉄砲を撃つ真似をした。

「動くはずのない練習用の的ですから、逃げていつてるんじゃないかと思うくら当たらない」

「ほう。そりや誰かさんと間逆だな」

徳永の言葉に、二人は顔を見合わせて笑い出した。

「あいつは、他の科目はからきしのくせに、射撃の成績だけは良かったもんな」

「そうそう、警察学校の同期の中でもダントツのトップだった。いつそうちの竹之下のところへ修行に出すか」

「そんなことしてみろ。下手なギャグだけ覚えて帰ってくるぞ」
「それもそうだな」

酔いがまわってきたのか、二人は他の客の迷惑も考えずに豪快に笑い出した。

「でも、竹之下も年をとったのかこの頃すっかりぐちっぽくなってるさ」

「へえ」

「たまに桜田門に行くとか掴まっちゃまって、たつぷり聞かされるんだ。それもいつつも同じ話」

「何？カミさんの悪口か？」

西田は頭を振った。

「公安は経費使い放題でいいなあ。俺たちなんて、張り込みの時のジューズ代すら出ないのに……。同じ警察でも、扱いが違いすぎやしないかあ」

西田は竹之下の口ぶりを真似しながら言った。それがまた、あまりにもよく似ていたので、徳永は目に涙を浮かべながらいつまでも笑っていた。

真新しい墓石に水をかけ、花を供えると、圭は静かにその前に座

り、手を合わせて目を閉じた。

タカシ、カツチャレンジャーの収録も無事に全部終わったよ。子供たちから、『ケッツ・ヒエンを出してください』っていう手紙がたくさん届いてた。俺も、もつと見たかったな……。

圭の隣には、同じように墓石に手を合わせている、愛理奈の姿があった。

了

エピソード（後書き）

最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。拙い文章、稚拙な構成だと自負しておりますが、もしお楽しみいただけたならうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248d/>

DOUBT SNIPER

2010年10月8日15時36分発行